

新・龍が如く クロス
オーバー VACANCES
IN LOS ANGELS

宝蔵院 胤舜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

龍が如く クロスオーバー の新シリーズです。

「龍が如く 極 2」発売記念（笑）。

今回は、長編になります。

桐生と遙の、ロサンゼルス珍道中（？）です。

内容的には、拙作「龍が如く クロスオーバーシリーズ」の、

第九話 実録 東城会 — 龍の系譜

と同時進行の物語です。

良ければご参照下さい（笑）。

令和4年9月9日～9月22日 『ルパン三世 カリオストロの城』 全国公開記念

おまけのまとめ 182



192

第一章 California girls

その1

VACANCES IN LOS ANGELES

第一章 California girls

〔1〕

平成二十二年（2010）の警視庁汚職事件、そして平成二十三年（2011）の新宿神室町ゾンビ事件、その両方に巻き込まれた澤村遙に対して、心的外傷後ストレス障害を懸念した養護教諭の判断により、一ヶ月の自宅静養が決定した。遥本人は、すっかり荒事慣れしてしまっているのに、特にダメージを受けたとは思っていないのだが、学校側からの申し渡しなので、喜んで休みを貰う事にした。

普段は学校に行っているのだからなかなか手を付けられない、アサガオの台所の掃除を、桐生と一緒に隅々までしたりして、それはそれで楽しい日々が始まった。

そんなある日、アサガオの前に一台の車が停まった。黒いセンチュリーである。降りて来たのは、黒いスーツの男で、明らかな堅物である。

誰何した桐生に対し、男は名刺を示しながら、現防衛大臣の田宮隆造の秘書官だ、と答えた。午後七時に、市内の某料亭に二人で来て欲しい、と言う。遥は、アサガオの皆に晩ごはんを食べさせてからなら良い、と答えた。男はその答えを予期していたようで、快諾すると、午後八時頃に迎えに来る、と言いつ残して一度引き取った。

夕方、子供達が夕食を終えた頃に、再びセンチユリーがやって来た。二人はそれに乗り込み、某料亭へと案内された。

料亭の離れに通されると、既に料理が並べられており、そこには田宮隆造本人が座っていた。

「悪いが、先に始めさせて貰っているぞ」

田宮は猪口を差し上げて、赤ら顔をほころばせた。

桐生が遥を促して席に着くと、田宮は徳利を差し出した。桐生は猪口を一口で干すと、田宮を真正面から見据えた。

「で、用件は何だ？」

そう言う桐生に、田宮は笑って酒をあおった。

「そうせつかちでは、政治家にはなれんな」言ってから、少し表情を改める。「実はな、アメリカに居る、風間讓二から連絡があつてな」

「風間から？」

桐生は眉をしかめた。

「澤村さん、何でも、今は休学中だそうだな？」

猪口を置いて、田宮が尋ねた。

「はい。そうですけど……」

遥は答えると、箸を置いた。

「まあ、これは内々の話ではあるが、君達、特に澤村さんには、新BMDシステムの件や、タナトスの件で、アメリカとしても迷惑を掛けてしまった。そこで、君のこの休学の間に、君達をアメリカに招待したい、とこう言つて来たのだよ」

「えっ？アメリカですか！」

遥の中で、夢が一気に膨らんだ。デイズニールランド、ユニバーサルスタジオ、ハリウッド、サンタモニカ……

「でも……」遥はすぐに意気消沈した。「私、パスポート持ってないし。それに、一人で行つても面白くないし」

「君達、と言つてるだろう」田宮は笑つて言った。「恐らく、澤村さんはそう言うだろう、と言つていたよ。心配するな。招待するのは、君達二人だ。何なら、友達を誘つても良いぞ。パスポートの事も心配するな。米政府からの特別な計らいで、パスポートもビザも必要ない」

「そんな都合の良い話しがあるのか？」

桐生はそんな疑問を口にした。

「その問いは最もだ」田宮は手酌で酒をあおった。「そこは、裏ルートでどうにでもなるものさ」

「ねえ、おじさん」瞳を輝かせて、遙が言った。「花ちゃん、呼んでもいい？」

ゾンビ事件以来、遙は花と仲良くなり、メールや手紙でやり取りを続けていた。

「ああ。花さえ良ければな」

桐生は笑って答えた。

「よし、これで話は決まったな。では、三日で用意してもらおう。花、だったかな、大至急連れて来るから、連絡だけは入れておいてくれ」

田宮はそう言うのと、新しい徳利を手を取った。

「とりあえず、メシを食って、出発まで存分に鋭気を養ってくれたまえ」

出発の日が来た。午後三時頃に、銀とピンク、二つのサムソナイトを引いて、桐生と遙はアサガオの前に出た。そこには、黒いセンチュリーが待機していた。前に来た秘書官である。

二人は、アサガオの子供達と、事情を聞いて留守番を買って出た名嘉原に見送られて、車に乗り込んだ。二人はてつきり那覇空港に行くと思っていたのだが、到着したのは普

天間基地だった。基地のゲート前に、風間讓二が立っていた。秘書官は、風間に二人を引き渡して去って行った。

「カズマ、ハルカ、よく来た」

「久しぶりだ、と言いたい所だが」桐生は腕を組んだ。「アメリカに行くと思っていたが、実は米軍基地止まりなのか？」

「No. 民間の空港より、こちらの方がイミグレーションがイージーだからだ」

「どう言う事だ？」

「すぐに判る。案内しよう。ハルカ、ユーのフレンドも来ている」

三人は、控えていたジープに乗り込み、基地内を走り出した。ジープはそのまま滑走路へ乗り入れ、駐機している飛行機の横で停まった。そこには、赤いサムソナイトの横で不安げな表情をした、花が待っていた。

花は、遥の姿を認めると、泣き顔で駆け寄って来た。

「ちよつとー、遥、何よこれー？」

遥は、花の首つ玉に抱きついた。

「花ちゃん、急にご免ね」

遥があやすように言うと、花は周りの米兵を見ながらまくし立てた。

「この人達ヒドいのよ！軍服よ、この迷彩の軍服でよ、神室町のお店までやって来て、『三

時間で支度しろ』って言うのよ！さすがの社長（秋山駿）も、目が点だったわよ！」

「ホントご免ね。私が一緒に行きたいなんて言ったから」

「んーん、むしろありがとう、遥。でもね、ちよつとびっくりしちゃったの」

花はそう言つて、すぐ横の飛行機を見上げた。遥と桐生もつられて見上げた。

それは、ボーイング747。俗に『エア・フォース・ワン』と呼ばれるものだった。

「これに、乗るの？」

花が呆気に取られて、呟くように言つた。

「特別チャーター便だ」

それに答えて、風間が言つた。

「これつて、大統領専用機よね？」

「今は非番だから心配ない」

「いや、そう言う事じゃなくて…」

花は頭を抱えてしまった。明らかにフツーではないシチュエーションである。

「これなら、イミグレーションなしで入国出来る。この機内、引いてはこの基地自体が既にステーツだからだ」

そう言つと、風間は親指を立てて見せた。

普天間基地を午後五時に離陸して約九時間後に、エア・フォース・ワンはLAX（ロ

サンゼルス空港）に到着した。約十七時間の時差があるので、ロスは出発と同じ日の午前十時である。初めての海外旅行である桐生と遙は、少々面食らってしまった。

「今日の夕方に日本を出たのに、ご飯二回も食べて、結構ゆっくり寝ちゃったのに、まだ今日の朝十時なの？」

遙が目を丸くして言った。

「時差って、最初は私も手間取ったけど」花は笑って言った。「晩ご飯食べて一晩寝たら、朝陽を浴びてすぐ慣れるわよ」

「そんなもんなのか？」

カリフォルニアの四月の乾いた陽光を、サングラスで遮りながら桐生は言った。自分の体内時計が、今の明るさを認めていなかった。

巨大な空港の滑走路に立っていると、まるでテレビドラマで見たような、黄色く乾いた空気が桐生と遙の現実感を奪う。

「映画のセットみてえだな」

思わず桐生の口から、そんな言葉が転がり出た。

「そうだね」遙も笑って同意した。「『ダイ・ハード』とか『ダーティ・ハリー』とかね」「遙、映画のチョイスが渋いね」

花が笑った。

「だって、おじさんが観るのって、そんなのばっかりだもん」

「あー、諸君、アテンション」

風間が口を開いたので、三人はそちらを見た。

「CIAの仕事はここまでだ。次に会うのは、一週間後、帰国の時になる」

「俺達はこれからどうなるんだ？」

「カズマ、ユー達の入国後のガイドは、FBIに引き継ぐ事になっている」

「FBI？」

「もうすぐオフィサーが来るはずだ」

そう言った風間の背後に、滑走路上を走って来る一台の自動車が見えた。もの凄いスピードで見える見る近付いて来ると、四人の前でドリフトで急停車した。ゴムの焼けるにおいが漂う。

「うわあ、『ナイト2000』だ！」

花が感激の声を上げた。ドラマ『ナイト・ライダー』のハイテクカーである。

「年がバレるぜ」

桐生が笑って言った。かく言う桐生も、若い頃にトランザムの『ナイト・ライダー』カスタムを個人輸入しようと企んだ事もある。

「いいじゃないですか。好きなんだから」

そんな事を言い合っていると、ナイト2000のドアが勢い良く開き、中からビキニトップにデニムのホットパンツ、ピンヒール姿の女性が降りて来た。車の前に仁王立ちになる。ポップなサングラスで隠され、顔ははつきりと見えなかったが、桐生にはそれが誰なのか、すぐに判った。

「お、お前、まさか…」

「ああ、ホンマに一馬や。久しぶりやな」桐生の機先を制するように、女性が口を開いた。「それに、遙。大きくなったなあ。メツチャ可愛いなつたやん。それと、あなたは初めましてやな、花さん。来てくれておおきにやで」

呆気に取られている三人に、風間が言った。

「ユー達はもう知っているとは思うが、紹介しておこう。今日からユー達のエスコートをする、FBIオフィサー、カオルIIサヤマだ」

「一馬、遙、花、Welcome to Los Angels!」

狭山薫は爽やかに言い放った。

つづく

20171212

その2

VACANCES IN LOS ANGELS

第一章 California girls

〔2〕

「一馬、遥、花、Welcome to Los Angels!」

狭山薫は爽やかに言い放った。が、その場の空気に小首をかしげた。

「どしたん? せっかくロスに来たいうのに、ノリ悪いなあ」

「薫、お前、そんなキャラだったか?」

桐生はそう言いながら、薫を上から下まで眺める。

「あんまりマジマジと見んといてよ恥ずかしい」

「薫さん、凄いセクシーですネ」

遥の言葉に、薫は満面の笑顔で答えた。

「ホンマ? 良かった。ちよつと”西海岸らしさ”を演出してみたんや」

「ケイティIIペリーみたい」

「花ちゃん当たり。『California girls』のイメージ」

そこで、薫は苦笑いの表情で立っている風間に向き直った。

「三名の搬送、ありがとう。身柄は現在よりFBIが引き受けます」

薫の敬礼に、風間も敬礼を返した。

「では。ミュラー・ザ・サードにもよろしく」

風間はそう言うのと、踵を返して、またエアフォース・ワンに乗り込んだ。その後ろ姿を見送りながら、桐生が呟いた。

「風間はどこへ行くんだ？」

「彼？用が済んだから、ラングレー（CIA本部）に帰るんじゃない？」

薫は興味なさそうに答えた。

「飛行機でか？」

「バージニアやから、二時間くらいフライトやね」

「アメリカかって、そんなに広いのね」

遥が感嘆の呟きを漏らした。

「そおやで。広いんやから、ボヤボヤしてる暇ないで。ほら、乗った乗った」

トランクにサムソナイトを放り込むと、花と遥が後部座席に乗り込み、桐生はサイドシートに座った。右側という事に頭が困乱する。

「大丈夫。すぐ慣れるわ」

そんな桐生を見て、薫は小さく笑って言った。

「今からどこに行くんですか?」

花の問いに、薫は明快に答えた。

「S i g h t s e e i n g. とりあえず近場に案内するわ。まずは海から見て貰うから」

ナイト2000はLAXを出ると、マンチエスター・アベニューを西へ走り、右折してリンカーン・ブルーバードを北西に取り、アドミラルティ・ウェイに入り、左手にマリナ・デル・レイを見ながら更に西へ向かう。

「ねえ、薫さん」

花が、マリナ・デル・レイのヨットの帆を眺めながら問いかけた。

「なあに?」

「さつき、風間さんが言ってた、ミユラー・ザ・サードつてもしかして?」

「そう。ロバートⅡSⅡミユラー三世。FBI長官よ。今回のみんなの訪米に協力してくれたの」

「今回の訪米って、そんな政治的な背景があつたんですか?」

「B O S S 的には“ヤクザ”の存在に興味があるみたいよ」

薫は桐生を横目で見ながら言った。それに対して、桐生は肩をすくめただけだった。車はワシントン・ブルバードからパシフィック・アベニューへ右折した。もう、隣の道の向こうは太平洋である。

薫は、車をパシフィック・アベニューとマリーン・ストリートとの交差点に近いパークینگに停めると、三人をビーチへ案内した。

「ここがベニスビーチ。正面は日本まで続く太平洋。こつから北へ行けば、サンタモニカビーチや。見てみて」

そこは、オーシャン・フロント・ウオークという通りで、ビーチに面した道路沿いに、種々な店が立ち並んでおり、大道芸などもやっている。サーフィンのメツカであると同時に、スケートボードやローラースケート、サイクリングも盛んで、ビキニ姿の女性達が見え、スケートで走り抜けて行く。

「カリフォルニアだな」

桐生は思わず呟いた。

四人は通り沿いにある、ハンバーガーの屋台に寄った。

「こじやれたレストランより、ずっと西海岸らしさを味わえると思ってね」

薫はそう言うのと、ハンバーガーを四つ注文した。メニューはない。すぐに、グリルの上に大きなパティが乗せられ、良い焼き音が響く。

「凄い。パティと言うより、普通のハンバーグよね」

グリルを覗き込んだ花が目丸くした。

「マクドに慣れてると、ちよつと驚くよね」

薫も笑いながら言った。

すぐに四人分が出来上がった。それぞれにコークや7upのラージサイズが付いて\$5,85。

「うわー、でっかい！」

遥が目を白黒させた。チェーン店のハンバーガーの倍はある。

「豪快にガブツといっちゃって」

言うが早い、薫は大きく口を開けて、ひと口かぶりついた。口の周りにケチャップやアボカドソースが付くのもお構いなしである。

花も負けじとかぶりつく。

「うわ、おいひい！れんれんひがう！」

口の中を一杯にしながら、花が歓声を上げた。

遥がその大きさに食べあぐねていると、横から桐生が半分に切ったものを差し出した。店先にあったプラスチックのナイフを使ったのだ。

「ありがとう、おじさん」

遙はようやくハンバーガーにありつけた。

「わあ、凄い。パンも柔らかくておいしい！」遙ははしゃいで桐生を見た。「こんなの食べた事ないね！」

そう言われた桐生は、既に自分の分と、遙の半分を平らげて、牛乳パックほどもあるラージコークを飲んでいた。

「確かに美味しいな。野菜も多いし、十分一品料理だな」

皆でわいわいと言いなながら食事をしていると、その前を通り過ぎたビキニトップにハーフトイツでジョギング中の女性が、回れ右をして戻って来た。

『ねえ、ちよつと、カオルじゃない。どうしたのよこんな所で』

彼女は戻って来るなり薫に声を掛けた。

『まあ、サラ、久し振り。元気だった？』

『ありがと、元気よ。それよりカオル、最近あまりスタジオに姿を見せないわね？』

『ご免、サラ。この所仕事で手が空かなくて』

二人は英語でまくし立てた。桐生と遙はさっぱり判らない。

『ちよつとご免なさい。カオルサン、こちらの美人さんはどなた？』

その会話に、花が割り込んだ。

『あら、ハナチャン喋れるんだ』

『ちよつとカオル、こちら誰なの？』

『こちらハナチャン、日本から来たの』

『初めまして、ハナと言います』

薫と花、そして白人女性の三人で英語で話している間、桐生と遙は置いてけぼりであつた。

ひとしきり談笑が終わると、薫が桐生達の方に振り向いた。

「ご免ね二人とも。こちら、私の通つてるヨガスタジオの友人で、サラ・ブライアント。ブライアント財閥の娘だけど、今はサンタモニカでひとり暮らしなの」薫は彼女を紹介した。「サラ、こちらはカズマ・キリュウとハルカ・サワムラ」

『カズマ、こんにちは。私、サラ』

サラは手を伸ばして来た。桐生はその手を握つた。その直前、サラの瞳が輝いたのを、桐生は見逃さなかつた。

サラは、握手をした瞬間、手首を起こして合気を掛けて来た。桐生はそれを察知して、肘を落として合気を外した。

それを感じて、サラの瞳がかすかに細められた。

『うふ、よろしくね、カズマ』

サラは笑つて手を放した。今のやり取りは、当人同士にしか判らなかつた。

(中々油断ならねえ娘だな)

桐生は小さく唇を歪めた。我知らず笑っていた。

サラは何事もなかったように、遙と握手をしてキヤツキヤツと笑い合っている。

(そうか。誰かに雰囲気か似てると思っただが、結城晶だ)

桐生は、古い友を思い出して、一人合点した。

『カオル、これからどこへ行くの?』

サラが笑いながら尋ねた。

『ホテルのチェックインもあるから、フリーウェイでダウンタウンへ行くつもり』

薫が答えた。遙へは、花が同時通訳している。

『そう。じゃあ、気を付けてね。またスタジオで会いましょう』

そう言っ手て手を振ったサラだったが、ふと薫の耳元に顔を寄せた。

『あれがあなたのイイ人? ちょっと妬けるわ』

『何言ってるのよ』

薫は少しはにかんだ。

サラはそのまま手を振りながら走り去って行った。

「ねえ花ちゃん、今のサラってひと、凄いきれいだっただね」

遙が瞳を輝かせながら言った。

「何だか凄い美女すぎて、私気後れしちやったわ」

花が肩をすくめながら返した。

「花ちゃん凄いやん。英語完璧だよ」

薫が笑顔で言った。

「前の銀行では海外部だったから。社長（秋山）の通訳代わりだったんだ」

「花ちゃんてやっぱりスゴいな」

遥が憧れの眼差しを向けた。

「さて、と」薫がボンと手を打った。「今からダウンタウンへ行つて、ホテルにチェックインするから。しばらくロスの風景を楽しんで」

ナイト2000は、サンタモニカ・フリーウェイに乗り、東へ走り出した。しばらくすると、左の山肌小さく『HOLLYWOOD』の文字が見えた。

「わー、ホントにハリウッドだ！」

遥は窓に張りついて、何か見えるたびに歓声を上げている。

「ところで、薫」

桐生は、先程の疑問を口にした。

「さっきのサラって女、何者だ？握手の時に、手首を極めに來たぜ」

「あら、あの子そんな事したん？」

薫はカラカラと笑った。

「笑い事じゃねえだろ」

「あの子ね、ジークンドーの道場にも行ってるの。お兄ちゃんの影響らしいけど。お兄ちゃん、インディ・カーのパイロットらしいで。それで、お兄ちゃんと二人して、世界格闘なんかに出てるらしいわ」

「その話し、どつかで聞いた事あるな」

桐生は首を捻った。

「おじさん、それ、アキラさんじゃない？」

遙に言われて、桐生はようやく思い出した。

「ああ。やっぱり結城晶か。あいつが世界格闘トーナメントに出た時、友達になったジークンドー使いが確か、ジャッキー・ブライアントとか言ってたな」

「それ、サラのお兄ちゃんや」

「なるほどな」

そんな話しをしているうちに、車はハーバーフリーウェイにスイッチして、ダウンタウンへと近付いて来た。

「あの高層ビル群を見ると、『ジョン&パンチ』を思い出すわ」

花が溜め息まじりに言った。

「何、それ？」

遙には全く解らない。

「えっ、遙、『白バイ野郎ジョン＆パンチ』ってドラマ、知らないの？」

花は逆に驚いた。

「そりゃあ知らないだろう。ジエネレーションギャップって奴だ」

桐生が意地悪く突っ込んだ。

「わー、イヤだー、私、オバサンなんだわー」

花はわざとらしく頭を抱えて見せた。

ナイト2000は、ハーバーフリーウェイを降り、ダウンタウンへと入って行った。

つづく

20171227

※「カリフォルニアだな」 『ダイ・ハード』の、ジョン・マクレーン（ブルース

・ウィリス）のセリフ。

※ 結城晶と桐生一馬との関係は、『龍が如く クロスオーバーシリーズ』の第一

話等をご参照下さい。

その3

VACANCES IN LOS ANGELES

第一章 California girls

〔3〕

ナイト2000はハーバーフリーウェイを降りると、シックス・ストリートを南東へ進んだ。丁度ダウンタウンの高層ビル群の足元を走る。ヒル・ストリートで左折すると、結構車の通りの多い中を走り抜け、シビック・センターを左に見つつ、ファースト・ストリートを右折した。左側にシテイ・ホールの塔を見て、薫が正面を指差した。

「もう、そこがリトル・トーキョーや。そこに宿を取つてあるから。日本語も通じるわ」
車はリトル・トーキョーにあるミヤコホテルのエントランスに入った。薫は、走り寄つて来たヴァレット（駐車係）のホセにナイト2000を預けると、三人をフロントに案内した。

遙と花は二人で部屋に入ると、サムソナイトを解く暇も惜しんで、大急ぎで手荷物だけを握りしめて再びフロントまで出て来たので、三人をロビーで見送つてからタバコに

火を着けた薫は、まだ一本喫い終わっていないかった。

「何や、そのままではええの？着替えるか思たのに」

「んーん、大丈夫。何か、着替える時間ももつたない気がして」

遙が頬を上気させている。初めての海外旅行で、胸が一杯なのだ。

「ちよつとご免な。あたしが着替えるから、待つててな」

薫はフロントに声を掛けて、クロークの奥に入ると、ほどなくスーツ姿で出て来た。

「あら、セクシーシヨットはおしまいですか？」

花の言葉に、薫は笑って返した。

「実はね、日が暮れるとちよつと寒いねん」

桐生は、薫が着替えている間に降りて来ていたので、薫を先頭に四人はホテルを出た。

ホテル前を通るファースト・ストリートを西へ行き、ロサンゼルス・ストリートとの交差点へ出た。ファースト・ストリートを渡って、ロサンゼルス・ストリートを北へ向う。

「あの左手のタワーが、ロスの市庁舎や。で、ここがな、」

薫はそう言いながら、市庁舎手前の右手側、少し奥まったビルを示した。

「ここな、パーカーセンサーいうんやけどな」

薫が皆まで言わずとも、花には判ったようだ。

「あつ、ここがLAPD!」

「さすが花ちゃんやな」

「花ちゃん知ってるの?」

遥はきよんとしている。

「えっ? だって、LAPDだよ。『SWAT』に『コロンボ』に『リーサルウェポン』、色んなドラマとか映画の舞台になってるんだよ」

『『コロンボ』見た事ある」

「コロンボ刑事のいる」ロス市警「がここよ」

「へえー、そうなんだ」

ロサンゼルス・ストリートの下を走るハリウッド・フリーウェイを越えると、中心に大きな木が立つ広場があり、一気に雰囲気が変わる。明らかなラテン系の人々の間を抜け、三メートルほどの十字架の前までやって来た。その向こうは、細い露地の両側に小さな店が立ち並んでいる。

「ここは、オルベラ街ゆうて、ロサンゼルス発祥の地なんやて」

「へえーっ!」

遥と花は感嘆の声を上げた。

「でも、メキシコ系なんですな」

「もともとロサンゼルスって、メキシコからの入植者の集落から始まったみたいやで」
「それで、ここもメキシコ風なんですね」

花は、そう言いつつ通りを覗き込む。

「テイワナへ行くよりずっといいかもね」

女三人の会話を聞きつつも、桐生の目は、とある土産物屋を捕らえていた。店先で、若者が五人ほど、店主らしい老夫婦に食って掛かっているように見える。

「どこでも、やる事は変わんねえんだな」

桐生は呟くと、薫の横をすり抜けて、オルベラ街に足を踏み入れた。

周りの店の対応、老夫婦の反応、五人の若者の口調等、言葉は解らなくても大体の事情は理解出来た。

「おい、お前ら、その辺にしとけ。そういうのは、裏でやる事だ」

桐生は日本語で言った。通じる訳はなかったが、語気は伝わったのだろう。若者達は一斉に桐生を見た。全員メキシコ人だ。

何でチンピラってのは、ひと目で判っちゃうんだらうな。

桐生の唇が笑いの形を取った。

「結局、ロサンゼルスと言っても、神室町と同じなんだな。何だか安心したぜ」

桐生は指を鳴らしながら言った。

メキシコ人達が何か桐生に向かって喚んでいるが、スペイン語なので、桐生には解らない。尤も、英語でも解らないのだが。

「グダグダ言つてねえで、掛かつて来い！」

桐生は構えながら、鋭く言つた。

言葉は解らなくても、意志は通じたらしい。一番若い男が、拳を振り上げながら突進して来た。

丁度そこへ、薫が駆け寄つて来た。

「ちよつと一馬、待ちなさい！」

そう言つた薫の足元に、若い男がきりもみしながら吹つ飛んで来た。桐生のフックにやられたのだ。一撃で気絶していた。

二人目は、ボクシングの構えで、ゆつくりとステップを始めた。桐生は一気に間を詰めて、驚きの表情の上にストレートをぶち込んだ。男は真後ろに吹つ飛んで行つた。

三人目は完全にフリーズしていたので、その場で横蹴りを腹にめり込ませた。路上で胎児のように丸くなる。

残つた二人は、同時にナイフを取り出した。桐生は近い方の手元を足で払い、ナイフを飛ばし、そのナイフを追つて頭を振つた所に、手刀で延髄を打つた。男は棒のように倒れた。

最後の一人は目茶苦茶にナイフを振り回したが、桐生はそれをあつさりとかい潜つて、顎先を突き抜いた。男は糸の切れた人形のようにストンと倒れた。

「Gracias, Gracias se・or.」

老夫婦は桐生に礼を言ったが、すぐにビクリとして身を縮めた。桐生が二人の視線を追うと、小さな老人が立っていた。ジーンズに長袖のポロシャツの上からポンチョを被っている。優しげな見た目からは想像出来ない眼光を放っている。

「あんたがこの辺のボスカ」桐生は通じない事を承知で言った。「三下の教育がなっていないぜ。あれじゃあ、街にお前の威光は届かない」

『悪かったな、他所の人よ』老人は英語で言った。『ちよつと甘やかせてたら、この体たらくだ。良い勉強になつただろう』

『あー、カルロス、ご免。こんなつもりじゃなかったんだけど』

薫は済まなそうに老人に言うと、桐生に向き直った。

「もう。勝手に進んじやうんだから。でも、良く判つたわね、ボスの事。こちら、ロスのメキシカンの総元締め、カルロス。オルベラ街にあるロス最初のメキシコ料理店、『La Golondrina』のオーナーよ」

「やはりボスカ」桐生は改めて頭を下げた。「人のシマで勝手な事をした。悪かったな」

『あんたも名のあるマフィアの長（おき）と見受けたが？』

「昔の話しだ。今は堅気だ」

『まあ、そう言う事にしておこう』カルロスは破顔した。『晩飯、まだだろう。俺の店で食って行けよ。迷惑掛けた詫びだ』

「カルロスはそう言ってるけど、どうする？」

薫は皆を振り返った。

「メキシコ料理、食べてみたい」

遥は二つ返事だ。

「遥ちゃん、凄いな。平気なんだ」花はまだ事態を呑み込めていない。「大丈夫なの？そこでご飯なんか食べて……」

路上には、まだチンピラ達が転がっている。

「気にするな。恐らく、今はオルベラ街で最も安全なレストランだ」

桐生はそう言って笑った。

意外と日本人の口に合うメキシコ料理を堪能した四人はミヤコホテルに帰ると、ホテル内のラウンジ「王者(Ohjah)」で改めて乾杯した。さすがにオルベラ街では落ちて着いて呑めないからだ。三人はバドワイザー、遥は一人、見事なまでに黄色いオレンジジュースである。

「あの一、ひとつよろしいでしょうか？」既に二杯目のカシスオレンジに口をつけて、花

が手を上げた。「今日、ロスに着いたばつかですよね？内容濃くないですか？」

「そう？まだまだこれからよ」薫のグラスはテキーラサンライズに変わっていた。「だって一週間しかないんやから。ロスを見て廻るには、短かすぎるわ」

「私は大丈夫よ」遙は涼しい顔だ。「おじさんと一緒に行動する事を考えたら、いつもよりずつと楽だもん」

「そうなんだ」

花は肩を落とした。

「それにね、私、こんなに楽しい事ばかりさせて貰って、すつごい嬉しいの！」

遙は、本当に嬉しそうに笑顔を満開にした。

「そうよね。今中三やもんね。一杯遊びたいやんな」薫も笑った。「一馬、そう言うところ、ちつとも判ってくれはらへんやろ？」

「俺には年頃の娘の事は良く判らん」

桐生はむすつと答えた。

「女を口説く時には、絶妙なトコロ攻めてくんのにな？」

薫に流し目で見られて、桐生は肩をすくめた。

「私、何だかどつと疲れちゃった」花が大きく背を伸ばした。「特にオルベラが。明日もあるし、先に休みます」

「あ、私も」遙も立ち上がった。「はしやぎ過ぎて、体力を使い切らない内に」

遙と花は、王者を出ると、部屋まで戻った。ツインの部屋に入って初めて、まだ荷物すら解いていない事を思い出した。

とりあえず身の回り品と着替えを掘り出すと、交替でシャワーを浴びて、さっぱりとしてベッドに座り込んだ。ベッドひとつがセミダブルほどの広さがあるので、遙と花二人で十分の余裕がある。

ほつと一息つくくと、花は冷蔵庫からクアーズとペプシを取り出した。

「はい、遙。改めて、今日はお疲れ様」

花はクアーズのプルタブを開けた。

「花ちゃんこそ、色々お疲れ様」

遙もペプシのプルタブを開けた。

『カンパニー!』

二人で一気に液体を流し込む。

『プハーツ!』

二人で同時に大きく息をついた。思わず二人して笑ってしまう。

「いやでもホント、怒濤の一日だったよ」

花は、改めて溜め息をついた。

「ホントごめんね。急に呼び出して、すぐアメリカで、おじさんすぐケンカだもんね」
「別に遥がどうって事じゃないんだけどね」花は肩をすくめた。「ほら、一千億とか、ゾンビとか、色々あったじゃない。私ね、もう、ちよつとした事ではびつくりしないと思つてたのよ。でも、今回の事は、驚く事ばっかり」

「うん。今回の事は私も驚いたもん」遥は枕を取つて胸に抱きかかえた。「だって、アサガオにいて、こんな旅行に出られるなんて、考えもしなかつたし」
「私、ホントにうれしいよ、声掛けてくれて」

花はそう言うと、ポンと飛んでベッドサイドの電話を取り、何事かを伝えた。

「ふふ、ルームサービス。普段しない事、色々しよう」

やがて小さなピザとミックスサンドが来た。二人はそれをかじりながら、話しに花を咲かせた。

「ところで遥」かなり良い色になった花がふと口にした。「薫さんって、どう言う知り合いな？ FBIって」

「元々大阪府警の四課の刑事さん。この間のゾンビ事件の時の、郷田龍司さんの妹なの。FBIは研修で来てるんだって」

「へえー。で、桐生さんとの関係は？」

「うーん、そうねえ」遥は少し考えた。「友達以上夫婦未満？」

「随分と幅があるね」

「お互い複雑なの」遙は大人びた笑顔を見せた。「セックスするくらいは親密だよ」

それを聞いて、花は思わず口の中のビールを吹き出しそうになった。

「ちよつと遙……」

「大丈夫よ。そのへん、おじさん明け透けだから。アサガオの皆の前ではそんな話はないよ、勿論」

「いやそうじゃなくて」

「おじさん、私のお母さんの事が大好きで、今でも忘れられないみたい。でもおじさんモテるし、そんなお誘いは多いみたいで。おじさん優しいから、大概は受けちゃうみたい」

「遙は平気なの？」

「昔から、色んなせつげんのにおいさせて帰って来てたし、すっかり慣れちゃった」

「そんなもんなの？」

「だって……」花の問いに、遙は目を伏せた。「おじさん、私のお母さんの事が好きだっただけで、私の面倒を見てくれて。でもお母さんはもう死んじゃって……。せめて、新しく好きになった女の人がいたら、仲良くしてくれたら良いなって……」

小さく鼻をすすった遙を肩を、花は優しく抱き締めた。

「良い子だね、遙って」

遥は小さく首を振った。

「またとないチャンスだね、この一週間は。せっかくだから、桐生さんに甘えて甘えて、甘え倒そう！」

「うん」

遥は今度は大きく頷いた。

つづく

20180110

その4

VACANCES IN LOS ANGELES

第一章 California girls

〔4〕

王者の隣にある、レストラン多間の朝食を目の前にして、遥と花は手を合わせた。

「いただきます」

遥はトーストとスクランブルエッグ、ベーコンと温野菜、アメリカンコーヒー。花はフレンチトーストとスクランブルエッグ、チョリソーと温野菜、ストロングコーヒー。二人とも、スープはソイスープ（味噌汁）である。

「お箸があつて良かった」

遥は笑いながら言った。昨日のメキシコ料理で、ナイフとフォークとスプーンに少々手こずったからだ。

二人が食事を始めたところへ、桐生と薫がやって来た。二人とも、何だかさっぱりとした表情をしている。二人ともストロングコーヒーのみである。

「お早よう」

遥が元氣にあいさつすると、薫は元氣に返した。桐生はいつも通りのトーンである。「昨日、あれからどこかに行つたんですか？」

花が何氣なく尋ねた。

「道向かいに、遼東（フアーイースト）つてレストランがあるんやけど、その奥にな、夜だけやつてるバーがあつてな。通路の奥」薫は笑いながら答えた。「しばらくそこで呑んで、通りをちよつとブラブラして、部屋に帰つたわ」

遥が桐生の顔をちらりと見ると、桐生は唇に人差指を当てて、ほんの少し首を振つた。
（ほら、やつぱり！）

（ホントだ、遥の言つた通りのポーズだ！）

遥と花は、小声でキヤツキヤと笑い合つた。ちなみに今の桐生のポーズは、「それ以上は聞くな」の意味合いであり、つまりは「アダルトモード」であつた事を意味している。薫はそんな二人を曖昧な笑顔で見つめた。

「何や、修学旅行みたいやね」

そんな薫の言葉に、二人はまたくすくすと笑つた。

「まあええわ」薫はあつさり切り替へた。「今日も忙しいで。遊園地のハシゴや」

「ハシゴ？」

「そうや」きよとんとする遙に、薫はいたずらつぽく笑った。「アメリカ最初のテーマパークと、夢の国はお隣りさんなんやで」

良く判らないながらも、一同はナイト2000に乗り込み、ホテルを出発した。

薫は車をサンタ・アナ・フリーウェイに乗せると、南西へ三十分ほど走らせた。

標識に「アナハイム」と見えたあたりでフリーウェイを降りると、オレンジ・カウンティという閑静な住宅街へ入り込んだ。

そんな住宅街の屋根の上に、突然観覧車やジェットコースターのタワーが見えて来た。

「ここが、ナッツベリーファーム。アメリカ最初のテーマパークや」

「えっ？…ハハ？」

思わず遙が言ってしまうほど、駐車場も大型ショッピングモールぐらいの規模で、まわりは普通の住宅地である。

パーキングに車を停めると、マーケットプレイス前を通り、エントランスゲートを通り抜けた。9・11以降、持ち物検査が厳重になり、ゲートは長蛇の列だったが、薫が手張を見せると、別のゲートから簡単なチェックで入れてくれた。

「今のは、”FBIパワー”って奴ですか？」

そう尋ねた花に、薫は笑って答えた。

「そうやって言いたい所やけど、さすがにそうは行かへんねん。純粹に、団体予約で通っただけやねんけど。ちよつと気持ち良かったやろ？」

ゲートを通り抜けると、スヌーピーとチャーリー・ブラウンが出迎えてくれた。”
ピーナッツ”がナッツのキャラクターである。

ナッツは、西部開拓時代がメインテーマであり、カウボーイ、馬車、機関車など、西部劇さながらの雰囲気である。

駅馬車に乗って園内を一周しただけだったが、純粹に「テーマパーク」を堪能して、遥はご気嫌であった。

マーケットプレイスにある、ホットドッグのチェーン店「PINK, S」で買った、ケイジャンドッグを食べながら、薫は言った。

「次が本命やからね」

「ここで既に本命な感じなんですけど」

花はフライドポテトをケイジャンスパイスで食べながら返した。

ナイト2000がナッツの駐車場を出て、フリーウェイにも乗らず三十分も走ると、ポール・ロードを南北に交差する道路に出た。薫は、そこで右ウィンカーを出した。その通りの名前を見て、花が遥の肩をつついた。

「ねえ遙、この道、デイズニーランド・ドライブって言うんだって」

花に言われて遙が標識を良く見ると、確かにそう書いてある。

「もしかして、デイズニーランド?」

遙は目を輝かせたが、見えるのは、パームツリーと灌木と巨大な立体駐車場だけであつた。

駐車場の目の前にトラムの駅があり、既に大勢の人々が列を作つていた。そこに並んでトラムに乗り込み、カーブを少し曲がると、一気に視界が開けた。そこは、見える物全てが遊園地であり、デイズニーであつた。

「ようこそ、デイズニーランド・リゾートへ」

薫は皆を促して、エトランススへ向かつた。やはり嚴重なセキュリティチェックの後、ゲートを潜ると、そこは夢の国であつた。メインストリートUSAへ来ると、丁度パレードの真つ最中で、遙の目の前を白雪姫やシンデレラ、そしてミッキーマウスなどが通り過ぎて行つた。遙は瞳を輝かせて、声もなくそのパレードを見つめていた。

「ほらな。遙ちゃんも女の子なんやから、こんなん好きやねんで」

「確かに、子供達の世話ばかりで、こんな事は考えた事もなかつたな」薫に肩を小突かれ、桐生は腕を組んだ。「俺が、遙に甘え過ぎている、という事なんだろうな」

それに対して、薫は肩をすくめただけで何も言わなかつた。

二人は、子供に返つてはしやぎ回る遙と花を眩しそうに眺めていた。

すると、その二人に白人の男二人組が近付いて行った。花と何事か話していたが、花が男から手渡された iPhone で何枚か写真を撮って、男達は離れて行った。

桐生は一瞬力を込めた握り拳を弛めた。

「ナンパかと思っただじやねえか」

「ランド内で暴力沙汰起こしたら、一発退去やで」

桐生と薫がそう囁き合った所へ、遥と花が小走りで近付いて来た。二人とももの凄いい笑顔である。

「どしたん？二人とも」

「今ね、男の人二人に『写真撮って』って言われたんだけど」

遥がちよつと勿体つけて切り出した。

「どうしたんだ？」

「ポーズがちよつとヘンなの。腕を交差させてターキーをあーんつてしてみたり、肩を組んだり腰に腕を回したり」

「ちよつとBLっぽかったよね」

花も遥に同調する。

「まあ、ロスはゲイカップル多いし、ホンマにそうかも知れへんで」薫は笑いながら、遥をけしかけた。「ほらほら、見たいトコとか、乗りたいモンがあったら、早よ行きや。人

気ある奴は待ち時間長いで」

すつかり暗くなるまでデイズニーランドを堪能した遙と、便乗して遙以上に楽しんだ花が、デイズニーキャラの小さなぬいぐるみを各々のバッグにぶら下げて、意気揚々と桐生達の所へ帰って来た。特に遙は、たまたま歩いていたミッキーマウスとツーシヨツト写真を撮らせてもらい、上気嫌であった。

「楽しんで来たか？」

桐生に尋ねられて、遙は満面の笑顔で答えた。

「うん、すつごく！今年一年分は楽しんじやった感じだよ」

「良かった。連れて来たかいがあったわ」

薫も笑って言った。

「何か、色々つまんで食べちゃったから、お腹一杯になっちゃったね」花が、最後のチュリトスを口に放り込んだ。「これで、後はホテルに帰るだけですか？」

「んーん、最後の締めくくりがあるで」

「締めくくり？」

遙は小首をかしげた。

「そうや。その為に、夜まで遊んでもろたんやから」

薫はそう言うのと、ニンマリと笑った。

「わーっ、すごーい！」

遙は思わず大きな声を出してしまった。それほど感動してしまったのだ。

薫はナイト2000をハリウッド・フリーウェイに乗せると、ダウンタウンを通り過ぎ、ハリウッドまで戻って来た。

今、彼らはグリフィス天文台にいる。ここのテラスからは、ロサンゼルス夜景が一望出来る。

少し離れた所にダウンタウンの高層ビル群があり、一際明るいのが、何よりも凄いのが、街路の明かりである。何本もの光の線が、地平線の彼方でひとつに纏まる。究極の遠近法である。

『E・T』でも使われた風景やって」

そう説明する薫の声も耳に入らないほど、遙は眼下の光に心を奪われている。今まで、新宿の夜景は何度も見て来た。ミレニアムタワーからの東京の明かりは、辛い思い出とセットだが、それでも美しいと思う。

しかし、この風景は違う。あらゆる感傷を廃して、純粹に目の前の絶景を見て、単純に凄いと思う。久し振りの、掛け値なしのストレートな感動だった。

薫は、そんな遙を微笑みながら見ていたが、やがて、スマホが鳴っているのに気付いた。画面を見て、大きな溜め息をついた。

「どうした？ 薫」

そんな薫の様子に気付いた桐生が、声を掛けた。

「ちよつとごめんな。クワンティコからや」

「クワンティコ？」

「FBI本部の事」

判らない桐生に、花が小声で説明した。

『もしもし』薫は不気嫌そうな声を出した。『何か用？ 私が休暇中って判ってて掛けて来たの？』

『おいおい、何て声出してんだよ』電話の向こうで、男は快活に笑った。『休暇なのは承知の上で連絡してるんだ。それだけ重要案件って事だ、カオル』

『二、三度寝たくらいで、あんまり馴れ馴れしく呼ばないでくれる、シーリー』ブース特別捜査官』

少し離れた場所で聞くともなく聞いていた花が、思わず薫を二度見してしまう。

『このチャンネルでそう言う話しをするなよ。録音されてんだぞ』

『あら、あたしは別に構わないわ。あなたのセックス、愛があつて、とつても良かったもん』

『それは、誉め言葉として有り難く聞いておくよ』そこでブースは口調を改めた。『休暇

中に申し訳ないんだが、是非とも頼みたい事があるんだ。君にしか頼めないんだ』

『何よ。随分勿体ぶるじゃない』

『実は、テンペー——テンペランスIIブレナン博士に聞いた話しなんだが、とある国の要人が、ステイツに入国するらしいんだ』

『それって、SPのお仕事じゃないの？』

『そこなんだよ』ブースは困ったような声音になった。『ボーンズ（ブレナン博士）の話しでは、何でもお忍びで来るらしくて、仰々しく護衛などを付けて欲しくないらしいんだ』

『ブレナン博士の知り合いなの？』って事は女性って訳ね』

『ご明察。しかも、その女性、明日ロスに到着するらしいんだ。君にしか出来ない任務だろう？』

『んもう、判ったわよ。で、詳細は？』

ブースが話し出した内容を聞いて、さすがに薫も認識が改まった。

『何よそれ。結構本気の話しじゃないの』

薫は思わず天を見上げた。

『勿論だ。じゃあ、頼んだぜ』

ブースはそう言って電話を切った。

「Oh my God!」

薫の口から思わず出たひと言に、桐生が目を向けた。

「どうした？結構長い電話だったか」

「んー、実はな、明日、ちよつと仕事に付き合つて欲しいねん」

「仕事つて、FBIの？」 遥が目を丸くした。「そんな大変な仕事に、私達が付き合つてもいいの？」

「むしろ、皆に一緒にいてもらた方がいいかも知れへんねん」

薫の言葉に、皆は首を捻った。

つづく

20180117

※ テンペランス・ブレナン博士、シーリー・ブース

米TVドラマ『BON

ES』の主役の二人。

※「California girls」 ケイティ・ペリー『ティーンエイジ・ド

リーム』2010年 より

第二章

カリフォルニアの青い空

その1

VACANCES IN LOS ANGELS

第二章 カリフォルニアの青い空

〔1〕

一夜明けて、桐生達はミヤコホテルのすぐ隣にある、高野山真言宗米国別院を訪れた。別院はロスの日系人コミュニティの中心にあり、北米開教を始めて来年で百年を迎える。

昨晚ブースから連絡のあった要人というのは、空港まではブレナン博士の知人が迎えに行くとの事なので、人目に付き易いホテルなどよりは、と薫が合流場所として指定したのである。

「へえー、こんな所にお寺があったんだ」花が、別院の駐車場に立って、溜め息をついた。「何か、箱庭みたいな所だね」

別院は、表はミヤコホテル、裏はリトル・トーキョーに囲まれて、表のファースト・ス

トリートからは見立たない立地にある。別院自体は、キリスト教の教会のような建物に唐破風や瓦葺きのひさし等があり、和洋折衷の感がある。

「お忍びの要人を迎えるには、うってつけやろ？」

薫が真面目な表情で言った。

「やあ、グッモーニン」

別院の庫裡に当たたるオフィスのドアが開いて、中から僧侶が出て来た。スーツの上から作務衣の上着を着た、老齡だが澆刺とした男性である。

「あ、宮田先生。お早ようございます」薫も元氣良く返した。「みんな、こちらは米国別院の主幹の、ビショツプ宮田。別院の使用を快諾してくれはって、おおきにやで」

「こちらこそ、そんなVIPをお迎え出来るなんて、スペシャルなサプライズですわ。今日は、檀家代表のケニー＝伊藤を呼んであるから、用があつたら彼に言つて」

「ケニー＝伊藤です。よろしく」

小太りの日系人が笑顔で頭を下げた。

薫は、腕時計を覗き込んだ。

「もうそろそろ、到着するはずやけどな」

「ところで、その要人って誰なんですか？」

花の質問は、桐生と遙の気持ちも代弁していた。

「多分、皆も知ってるんちゃうかな？」

薫がそう言った時、表の通りからも凄いいエンジン音が響いて来た。そのエンジン音は、細い露地状の別院の入口に入って来た。

音の正体は、赤いダッジ・バイパーだった。V型十気筒八リッターの豪快なエンジン音が別院のガラスが震える。

薫は、そのバイパーに見覚えがあった。

『ちよつと何？知人って、あなただったの？』

バイパーの運転席から降りて来たのは、カジュアルなスーツ姿のサラだった。

『そうよ。今回はテンペからの依頼で、正式なエスコート役よ』

サラはサングラスを外しながら言うと、車の反対側に回り、ドアを開けた。車の中から白い手が伸びて、サラの手を取ると、その手に引かれて女性が車外に降り立った。柔らかな明るいブルネットの髪に透き通るような白い肌、碧い瞳にすらりと通った小振りな鼻梁、ピンク色の唇には優しい微笑みが浮かんでいる。スカートのすそを軽く整えて背筋を伸ばし立ち上がったその姿は、愛らしさと美しさを兼ね備えており、「美しい女性」と表現する以外に言葉が見つからない。

「神だわ。美の神が目の前にいる」

花が茫然自失の態で呟いた。遙も、目をキラキラさせてその姿に見入っている。二人

にとつては、「おとぎ話のお姫様」が目前にいるようなものであった。

桐生でさえも、その圧倒的な美しさに言葉を失っていた。

薫は、完全な思考停止状態の三人はとりあえず放っておいて、その女性の前に歩を進めた。

『初めまして。FBI捜査官のサヤマです。ようこそロサンゼルスへ』

薫は努めて自然な態度で言った。

『ありがとう』女性は涼やかな声で答えた。『カオル、あなたの事は、テンペやサラから聞きました。無理なお願いをしましたが、どうかよろしくお願いします』

『いいえ。あなたの護衛をさせて頂けるなんて、光栄です』

少々緊張ぎみに、薫が答えた。

「ねえ、薫さん。こちらは、どなた？」

意を決して、遥が尋ねた。

「この方は、カリオストロ公国の、クラリス・ドゥ・カリオストロ公女や」

『えっ!?!』

遥と花は目を丸くした。

「クラリスって、あのクラリス姫の事？」

遥は息を呑んだ。日本では映画化もされた事件の主人公である。

「実在したんだ……」

花は思わず失礼な事を口走ってしまふ。

『まあ、立ち話しも何ですから、どうぞ中にお入り下さい』

ビショップ宮田が、止まりかけた時間を動かした。

別院の殺風景な応接間のソファにクラリスが座るだけで、雰囲気がるで変わって見えた。全員の自己紹介が終わると、ビショップ宮田は部屋を出て行った。ケニーも、皆にコーヒーを出すと、そのまま部屋を出た。

『改めて、カオルⅡサヤマをお願いします。私のロスでの滞在中の警護を頼みます』

『了解しました。なるべく一般人に見えるよう、カズマ達も一緒に行動させて頂きますが、良ろしいですか?』

『勿論です。皆と一緒にの方が、きっと楽しいわ』

クラリスは笑顔で言った。

『ところで』薫は少し口調を柔らげた。『今回の訪米は、プライベートで?』

『んー、半分半分といった所かしら。ひとつは、観光資源の有効利用に関する視察。公国は小さな国で、輸出出来る産業がほとんどないの。だから、湖やお城、ローマ遺跡などのコンテンツをうまく利用して、外貨を獲得するしかないの。先日、日本やフランスにも視察に行ったんだけど、あまりの歓迎振りに、嬉しくはあったんだけど、ちよつと窮

屈だったかな。今回は、なるべく一般人目線から見てみたいの』

『なるほど』

『実はね』サラが横から説明を加えた『カリオストロ公国の観光開発には、私の家、ブライアント財閥も名を連ねているの。実際には私の従兄が担当んだけど、女性目線の開発を、という事で、私もスーパーバイザーの一人として、クラリスとはお付き合いがあるって訳』

サラの言葉に頷くと、クラリスは言葉を続けた。

『二つ目は、公国内のインフラ整備、特にネット環境を見直したくて。テンペから、カオルがネットセキュリティのエキスパートだって聞いたから。今回あなたにお願いしたのは、この事もあったからなの』

『了解』薫は即答した。『それに関しては、お国のネット担当者の連絡先を教えてくださいたら、その方とお話しするわ』

『三つ目、ホントはこれがメイン・イベントなんだけど』クラリスはいたずらっぽく笑った。『明日、UCLAで、テンペランス・ブレナン教授の講演会があるの。それに出席したくて』

『あら。本当に半分はプライベートなのね』

薫は思わず笑ってしまった。

『ええ。十年程前かしら？公国のローマ遺跡内で遺体が発見されたの。警察の鑑識の結果、その遺体は遺跡と同時代という事が判って。それで、法人類学の権威として、テンペが来てくれたの。その調査の時に色々聞いた、法人類学のお話しが面白くて。それで、法人類学に興味を持って勉強を始めたの。テンペとの付き合いはそれ以来よ』

クラリスは笑いながら言った。

『それで今回は、色々な理由をつけて、ブレナン博士に会いに来たって訳ですね』

『だって、そうでもしないと、自分の時間が取れないんだもの。お城の皆には悪いとは思うけど』

クラリスは悪びれずに言った。現在は国家元首である彼女のやんちゃな一面を見て、遥は微笑んだ。

『そう言う事で、今日は観光資源活用サンプルを体験してもらおうと思ってるの』

サラが爽やかな笑みを浮かべて言った。

『大体想像はついたけど、一応聞いておくわ。どこへ行くの？』

薫の問いに、サラは大見得を切って答えた。

『ユニバーサル・スタジオ・ハリウッドよ！』

そこへ、新たなエンジン音が駐車場に入って来て、ホーンが鳴った。桐生がカーテンをずらして窓から外を見ると、黒いシボレー・タホ、V型八気筒六リッターの大型SU

Vが入って来た所だった。ドアが開くと、洒落たスーツの白人が降りて来た。

「何者だ、あいつは？」

訝しげに桐生は呟いた。それを聞いて、薫が答えた。

「あ、それね、あたしが呼んだんや。今の車じゃ小さ過ぎるやろ。夕ホなら弾除けにもなるし」

薫は言いながら部屋を出ると、男を出迎えた。

『ありがとう、スミス。助かったわ』

『カオル、最近ちつとも付き合ってくれねえじゃねえか。たまには呑みに行こうぜ』

『何度も言わせないで』薫は肩をすくめた。『あたしは、あんたにはもう興味ないの。今まで通り、同じ部署の同僚でいましょう』

『何を他人行儀な事を言ってるんだよ。知らぬ仲でもないんだぜ』

『知ってるからこそ、もう十分なの。あんたの一人よがりのセックスに付き合う暇はないわ』

『何だど？人が下手に出てりやあいい気になりやがって』

徐々にスミスの声が大きくなって来た。不穏な空気を感じて、桐生は薫に近付いた。後ろには、サラや遙、花、そしてクラリスも一緒に部屋を出て来ていた。

『それよ。その上からの態度。あたしが初めてロス支局に来た時、あんたは優しくして

くれた。いい人だと思ったけど、実は、ただ新人の女の味見をしたかっただけだったのよね』

『ビッチのジャップが聞いたような口をきくなよ』

『そのビッチを抱いたのはあんたでしょ?』

『生意気な口をきくな!』

スミスは右手を振り上げた。しかしその掌は、間に割って入った桐生の頬を張るに留まった。

「おい、スミス」桐生はスミスを睨みつけた。「お前、FBIがどうのじゃねえ、人間として終わってるぜ」

『Fuck you!』

スミスは今度はパンチを繰り出した。これも桐生は受ける。

『止めなさいよ!』

薫がスミスを止めようとしたが、桐生はそれを目で押さえた。

「俺は今、一方的に暴力を受けている。今からは自衛権を発動させるが、良いか?」

桐生は、最後はクラリスに向けて言った。クラリスは、花からの通訳を聞くと、優雅な動きで親指を立てた。

「ヤッチマイナ!」

クラリスは、確かに日本語でそう言った。桐生は笑ってしまった。

『『キル・ビル』かよ』

桐生は呟きつつ、スミスの左ジャブを避けつつ、クロスの左掌を軽く顔面に当てた。次に右フックと見せてガードを上げさせると、桐生はスミスの腹に左拳を当てた。そこから動作と呼吸を合わせて、ゼロ距離から威力を爆発させた。スミスは軽く浮くと、そのまま後ろへよろめき、背中から扉に激突した。スミスは勢大に嘔吐し、そのままくず折れると、自らの吐瀉物に顔を突っ込んで気絶した。

「女に手を挙げる奴に、ロクな奴はいねえ」

吐き捨てるように言った桐生を、薫が抱き締めた。

「いやや一馬あ、カッコ良すぎやん」

『まあ、仲が良ろしいこと』

それを見て、クラリスがクスクスと笑った。

(クラリス。この人も尋常じゃないわ)

花は声には出さずに呟いた。

薫が人目も憚らず桐生にベタベタしている所へ、サラが近付いて声を掛けた。

『ねえカズマ、さっきのパンチは何？ ジークンドーのワン・インチ・パンチみたいだったけど』

「ああ、今のは『古牧流古武術』の『徹し（とおし）』って技だ。ぶつつけ本番でやって見たが、何とか出来たようだ」

そんな三人を見ながら微笑んでいるクラリスに、遥が声を掛けた。

「クラリスさん、カッコ良かった。『ヤッチマイナ！』って」

『まあ、ありがとう、ハルカ。私は、強い女性が好きなの。チアキールクリヤマとか、ルーシーリユーとかね』

「クラリスさんも強かったよ」

遥はすっかりクラリスになついてしまった。

「えーっと、皆さん、お出掛けするんだよね？」ビショップ宮田が笑顔で言った。「行って来なさい。このコは、私が面倒見とくから」

ビショップ宮田は、まだ気絶しているスミスを見下ろした。ケニーは、そんなスミスにバスタオルを折り掛けると、肩をすくめた。

六人はタホに乗り込むと、薫の運転で別院を出発した。

つづく

20180126

20180130改

註：

ビシヨップ宮田、ケニー・伊藤

どちらもご本人にご登場頂きました。

日本では映画化もされた事件

詳しくは『ルパン三世カリオストロの城』を参

照の事(笑)。

チアキ・クリヤマ

『キル・ビル Vol. 1』で「GOGOタ張」を演じた。

ルーシー・リユ

『キル・ビル Vol. 1』で「オーレン石井」を演じた。

『キル・ビル』(Kill Bill)

2003年のアメリカ映画。監督はクイ

ンティン・タランティノー。配給ミラ・マックス／ギャガ。

『徹し(とおし)』

喧嘩芸骨法にも、同種同名の技がある。

その2

V A C A N C E S I N L O S A N G E L S

第二章 カリフォルニアの青い空

〔 2 〕

シボレー・タホはハリウッド・フリーウェイに乗り、一気にユニバーサルシティに乗り込んだ。

駐車場にタホを停めると、六人はメインエントランス前に立った。

花が、地球儀（ユニバーサル・グローブ）を見上げて言った。

「これって、USJのとは違うんですね」

「そうなん？」

薫が首をひねった。他の四人も判らない。誰もUSJには行った事がないのだ。

『ハナ、何が違うの？』

サラが尋ねた。

『ハリウッド・オリジナルは、フレームだけなんです。日本のは、フレームの間にボー

ドが入ってて、海は青く、陸は茶色で、普通の地球儀みたいですよ』

『まあ、そうなのね』

クラリスも、地球儀を見上げた。その瞳は少女のように輝いている。

『私、実はこういう所、初めてなの』

クラリスの言葉に、遙は目を丸くした。

「えっ、そうなの？」

『ええ。だって、大公家に生まれて、十一歳で修道院に入って、十六歳で出て来てすぐに大公代理として国政に携わる事になってしまったから、フツの女の子のような遊びとか楽しみは、ほとんどなかったの』

「そうだったんだ。何だか、お姫様とか、王女様とか、自由に何でも出来るような気がしてた」

『むしろ、不自由な身の上なのよ』クラリスは肩をすくめて見せた。『だからこそ、今日ひとつでもワクワクしてるの！』

『でも、お国の方でも、お城をテーマパーク風に公開してるって聞きましたけど？』

花が尋ねた。かの1979年の事件以降、城は「ゴート札記念博物館」として一般公開されている事は、彼女も聞き及んでいたのだ。

『確かにそうだけど、あれはあくまで資料館で、アミューズメント施設ではないから』

『ああ。それもそうですね』

『さあさあ、行くわよ！遅れないでね！』

サラが皆を促した。

『サラ、やけにテンション高くない？』

薫の言葉に、サラは満面の笑みで答えた。

『そりやそうよ。ここはへ私が来たかったんだから！』

『何よサラ、自分の趣味の為に姫様をダシに使ったって訳？』

『半分（ハーフ）はちゃんとした視察よ』

『半分ね…』

『ハーフでもクォーターでも何でもいいわ』クラリスが快活に言った。『早く行きましょ！最初は何を見せてくれるの？』

この日、LAPDに一通の手紙が届いた。署に直接宛てた手紙で、ご丁寧に真っ黒な封筒である。

『ハッ！ブラック・メールって訳か。ふざけた奴だな』

ロス市警殺人課の刑事部長、テリーハハラがその手紙を手に取った。ペーパーナイフで封を開けると、中にはワープロで打った手紙が入っていた。後に調べた所、打ったパ

ソコンも印刷したプリンタもフェデックスのレンタルらしく、名儀も偽名であった。手紙には、こうしたためられていた。

「今日、アメリカに入学したクラリス・ドゥカリオストロの身柄を頂きに参上する。邪魔立て無用。ルパン三世」

普段なら、ただの愉快犯と決めつけシュレッダー行きだったが、ハラの手は止まったままだった。

今日、クラリス公女が入学する事は、国務省を系由したカリオストロ公国からの懇願と、ブライアント財閥からの事実上の恫喝で、上位幹部以外にはトップ・シークレットであったのだ。それを知っていると、単なる悪戯と看過する訳にも行かない。しかも、よりによって「ルパン三世」と名乗っている。

ハラは、署長に内線を入れた。しばらく話してから受話機を置くと、辺りを見回した。『ダン、ちよつと来てくれ』

ハラは、丁度居合わせたダニエル・エスピノーザに声を掛けた。

『どうしたんです？ おお、絵に描いたようなブラック・メールですな』

『お前が担当してくれ』

『何です？』

『ルパン三世からの脅迫状（ブラック・メール）だ』

『ルパン？誰ですか？』

『知らんのか？世界を又に掛ける泥棒だ。自らアルセーヌルパンの孫を名乗っている。そいつが、プリンセス・クラリス誘拐の予告状を送りつけて来たって訳だ』

『えーっ』ダニエルはあからさまに不満の声を上げた。『カンベンして下さいよ。俺は殺人課ですよ。だいたい、そんな事、一介の刑事が担当する事案じゃないですよ。下手をしたら、国際問題じゃないですか』

『まあ、その辺は署長が対処してくれるらしいぞ。何でも、ICPOにルパン三世の専門家がいますから、そちらに打信してくれるとさ』

『でも、本当に誘拐が行われるかどうかとも判らないんですよ？そもそも、プリンセス・クラリスがどこの国のお姫様かも、私は知りませんよ』

『まあその辺は、”専門家”に任せれば良いんじゃないか？』

ハラが投げやりに言った所へ、内線が鳴った。ハラはしばらく聞いていたが、やがて礼を言いながら受話機を置いた。

『ICPOから連絡があったそうさ。何でも、そのルパン専従捜査官は、別件でサンディエゴにいるらしい。じきにこっちに来てくれるそうさ』

それから二時間ほどで、LAPDに男が一人やって来た。六フィートほどの身長にヨレヨレのトレンチコートを羽織り、四角い顔に帽子を被った姿は、頑固そうなイメージ

を見る者に与える。

男は刑事部で待つハラとダニエルの前まで来ると、帽子を取って敬礼をした。

『インターポールのルパン三世専従捜査官、銭形幸一警部であります』

姿勢の良い敬礼に、二人も思わず敬礼を返した。

『初めまして、ゼニガタ警部。私は刑事部長のハラです。こちらは殺人課のエスピノーザ』

『テリーハハラ。日系人初の警部の噂は聞いておりましたぞ』

『ありがとう』

上手に持ち上げられ、ハラも悪い気はしない。

『ところで』銭形は柔らげた表情をまた引き締めた。『ルパンから予告状が届いたと聞いたのですが』

『ああ、これです』

手紙を手持っていたダニエルが、銭形に手渡した。

銭形は、その手紙を広げると、思わず笑ってしまった。

『どうしたんです？』

そう尋ねたダニエルに、銭形は笑ったまま手紙を返した。

『全くのニセ物だが、むしろなゼルパンの名を騙ったのか、その方が気になりますな』

『ニセ物とすぐ解りましたな』

『勿論ですよダニエルさん。わしはルパンとは付き合いが長い。奴が、何をどうするかは良く判っている。これは、全く違うと断言出来る』

『ニセ物でも捜査はして下さるか?』

ハラは問いに、銭形は大きく頷いた。

『ルパンの名を騙るような奴らが、単独でそんな事をするとは考えにくい。背後関係を調べてみる必要がある。それに、クラリス姫がロスにいて、そして誰かに狙われているのなら、わしは姫を護らなければならん』

『彼女は今、FBIのオフィサーと行動を共にしている』

ハラはそう言って、一枚のメモを差し出した。

『プリンセスのたつての希望で選ばれたらしい。カオルⅡサヤマだ』

メモにはモバイルフォンの番号が書かれていた。

『了解した。後はわしに任せてくれ。ハラ殿、わしの捜査権を認めてくれるよう、上の人に言っといてくれ』

『判った』

『ダニエルさん、わしの車をどこでも止められるよう、許可証のようなものを作ってくれんか』

『何とかしましょう』

『よし、では、ニセルパンをとっ捕まえるのでしょうか』

錢形は、帽子を深く被り直して、力強く言った。

クラリスは、ユニバーサル・スタジオを堪能していた。

彼女は、生まれついでにの公女であり、人にかしづかれる事に異和感を持った事もなかった。修道院でも、大公の娘として大切に扱われたので、厳密にはそれほどの苦労はしていないし、対人関係においても、自分が上座である事に何の疑問も持たなかった。

彼女が国際社会に元首としてデビューしてからは、新参者として、他国の元首に侮られる日々が続いた。

カリオストロ伯爵は政治家としては辣腕であり、そのイメージを払拭するのにかかなりの努力が必要だった。中には伯爵時代の意趣返しで不穏当な言動をする者もあったが、持ち前の真摯で誠実な人柄で、クラリスは外交上の信用を取り戻して行った。

クラリスは、バチカンで大司教を前に、生涯不婚の誓いを立て、公国復興に一生を捧げる事を内外に宣言した。そして、後継者としてメデイチ家の遠戚から男の子を養子縁組する話しも既に纏まっている。

そんな、良くも悪くも公女として多忙な毎日を送っていたクラリスに、大きな出来事

が起こった。

彼女が1982年に来日した折、リゾート開発について打信があった企業との提携がバブル崩壊で一度頓挫したのだが、2001年にアメリカのブライアント財閥との共同開発という形で再度提携話が持ち来られた。日本側からは大規模なチームが送り込まれ、本格的な観光開発事業がスタートした。

その時、ブライアント財閥からスーパーバイザーとしてやって来たのが、ボビーとサラの二人だったのである。

「ねえ、クラリス、どうしたの？何か考え事？」

遙に声を掛けられ、クラリスは我に返った。途端に口の中に甘さが蘇った。ハーゲンダッツを食べている間に、追憶に入り込んでいたらしい。

『うん。サラと初めて逢った時の事を思い出してたの』

『十年前の話し？今考えるとちよつと恥ずかしいね』

サラが笑って言った。

『何があつたの？』

花の質問に、サラははにかみながら答えた。

『私も色々あつて、一人暮らしを始めた頃だったんだけど、従兄のボビーに声を掛けられたのよ。仕事を手伝って見ないかって。それが、カリオストロ公国の観光開発事業だつたのよ。』

たの』

『そこでクラリスと出逢ったのね』

『そうよ。あの頃は、私も何も知らないおバカさんだったから』サラは肩をすくめた。

『本物のお姫さまなら、お近付きになりたい、くらいの気持ちだったわ』

『でも、その気持ちって解るな』

遥がそう言うと、サラは笑顔を見せた。

『私はそんな半端な気持ちでいたのに、クラリスは真剣で、本当に国の事、国民の事を考えて、少しでも国を豊かにしようとしていた。私、何だか感動しちゃって、是非にでもお友達になって貰いたいって思ったの』

『今では素晴らしい友人になれたね』

クラリスも笑った。

『私と花ちゃんも、そんな友達になれるかな？』

遥は心からの思いでそう言った。その言葉に、クラリスは見惚れてしまうような美しい笑顔で答えた。

『ええ。もちろんよ、ハルカ、ハナ。これからよろしくね』

『はいっ！』

クラリスの言葉に、二人は大きな返事を返した。

「完全なる女子会だな」 桐生はタバコを食わえた。「俺の出る幕なしだ」

「ちよつと一馬、タバコは厳禁やで」

薫がたしなめたが、桐生は小さく首を振った。

「こいつは『禁煙パイポ』だ」

つづく

20180208

註：

※カリオストロ城テーマパーク構想は、『ルパン三世カリオストロの城大事典』1982年アニメック別冊の付録ソノシート「クラリスからの手紙」や、『ルパン三世カリオストロの城―再会―』（1997年 アスミック・エース プレイステーションゲーム）の設定にもある。

1979年 『ルパン三世カリオストロの城』は、1968年の事件という設定もあるようだが、ここでは『あれから4年 クラリス回想』（1983年徳間書店アニメージュ文庫）にある「クラリス 今年で20歳」というコピーより、1979年の事件の設定を採用している。

ダニエル・エスピノーザ 『LUCIFER／ルシファー』 アメリカの
ファンタジー・警察・コメディ・テレビドラマシリーズの登場人物。2016年 F
OX。現在シーズン3。

1982年の来日 『ルパン・トーク・ルパン』（1982年日本コロンビ
ア）の「クラリスとの再会」の設定による。

その3

VACANCES IN LOS ANGELS

第二章 カリフォルニアの青い空

〔 3 〕

陽が傾いて来たユニバーサル・スタジオ・ハリウッドを離れたクラリス一行は、ダウンタウンに戻って来ると、ファクトリー・プレイス内にあるインドア・シューティングレンジ「ロサンゼルス・ガン・クラブ」へとやって来た。

「あつ、私、この建物見た事ある」花が車を降りながら言った。「確か『トリビアの泉』でやってた『日本刀とピストルが対決したら』って奴で、検証場所で使ってた所だ」

「あら、そうなんだ。日本では有名なの？」

「多分、一部マニアの間だけ」

薫の問い掛けに、花はドライに答えた。

「まあ、こんな所も、日本にはないから、見といて損はないかな、って思ってた」

『私、とても興味深いわ。カオル、ありがとう』

クラリスが建物を見上げて言った。

『すみません、お姫様をこんな所へお連れしてしまつて』

『いいえ、むしろお礼を言わなきゃ。民を守るつて、綺麗事じゃ済まないもの。国内の犯罪や、他国の干渉からも守らなければ。その為には、”力”も必要だもの』

『大丈夫。的に撃つだけなら、オモチャと一緒によ』

サラが、そんな気楽な事を言う。

室内に入ると、それほど広くないロビーに、ガラスのショーケースがあり、その中に拳銃がズラリと並べられていた。そこが受付カウンターとなつていて、その後ろの壁には、ライフルやショットガンが掛けられている。それら全てをレンタル出来るのである。

『ハイ、リンダ』

薫が声を掛けると、少しとうの立つたメキシコ人女性が顔を上げた。大づくりな顔は、若い頃の美しさを十分に留めていた。

『あら、カオル、久し振りね』リンダは老眼鏡を指で押し上げた。『射撃時間、足りてないんじゃない?』

『そうなのよ。中々時間が取れなくてね』

『ところで今日は、大勢なのね。ティーンエイジャーもいるんだ』

『ええ。今日は、女性のセルフ・ディフェンスの講習でね。ガンの特性を知れば、身を守る何らかの役に立つかも、という事で、こちらを利用してもらうわ』

『そう。じゃあ、インストラクターもやってくれるのね?』

『まかせて』

『じゃあ』リンダは多少かすんだコピー用紙を取り出した。『一応決まりだから、カオル以外は記入してね。で、外国人はパスポート、アメリカ人はIDカードを用意して』

用紙は、注意書きの下に、習熟度を三段階（初めて、初心者、そこそこ）でチェックするようになっていて。最後に、自筆のサインを入れる事で、契約成立となる仕組みだ。

遙と花は当然「初めて」にチェックを入れた。サラは「そこそこ」にチェックする。

『本当は、マスタークラスだけどね』サラは事もなげに言った。『ブライアント財閥が全米ライフル協会の顧問をしているからね、まあこれくらいは、女子の嗜みよ』

そう言ったサラが覗き見た桐生の用紙は、「そこそこ」にチェックが入っていた。

『あなた、ジャパニーズでしょ? 何でそこそこガンが扱えるの?』

『本当はマスタークラスだがな』

桐生はボソツと言った。

『何張り合つとんのよ一馬』

そんな薫がふと見ると、クラリスも「そこそこ」を選んでいた。

『クラリスも銃の訓練をした事があるの?』

『ええ』クラリスは少し寂しげな表情をした。『私も、国を守る為にはそういう事を知る必要があると思つて、銃の扱いや、軍事的な訓練にも参加した事があります』

『クラリスつて、本当に努力を惜しまないのね』

『私が国民に返せる事は、これくらいだから』そう言つてから、クラリスはまた明るい表情に戻つた。『だから、たまにはこんな形の息抜きもいいよね?』

「ねえ、ところで薫さん」遥が心配顔で言つた。「おじさんと私、パスポート持つてないよ」

「大丈夫や。こんな時の為に、二人のFBIのIDカードを作つといたから。問題なしやで」

「逆に問題があるような気がするが?」

桐生の呟きはスルーされた。

全員が銃と弾丸ケースの入つたトレイを持つて、シューティングブースに入った。イヤープロテクターを着けていても、他人の射撃の轟音が耳を弄する。遥と花は、サラが付いてルガーの、22口径とワルサーPPK-Sを、キヤアキヤア言いながら撃つている。サラ自身は、スタームルガー・レッドホーク、44マグナムとデザート・イーグル、44マグナムをレンタルしている。どちらも世界的に有名な大口徑拳銃である。

桐生はS&WM―29・44マグナムと、AUTOMAG・44マグナムを黙々と撃っている。二丁とも抜群のマン・ストッピング・パワーを誇るハンドキャノンだ。

クラリスは、ワルサーP38と、S&WM27コンバットマグナムを選んでいた。

『意外と武骨で古い銃をチョイスしたのね』

薫が横からクラリスに声を掛けた。

『ええ。私が初めて手にした銃なの。私を救ってくれて、私に勇気と力をくれた人達が使っていた銃。お守りみたいなものね』

クラリスはそう言うと、両手で銃を構え、撃った。P38特有の乾いた射撃音が響く。七発撃ち尽くし、遊底が開いて止まると、ターゲットを引き寄せた。弾痕は八ヤード（約七メートル）先の的のほぼ中央に全て集まっていた。

『うわ、ちよつとなに？』薫は頭を抱えて見せた。『私より上手いじゃない』

『まだまだ全然ダメよ。あの人の足元にも及ばないわ』

『あの人って、もしかして…？』

薫は言いかけたが、スマホの着信に気付いた。FBIの専用回線である。

『ちよつと失礼』

薫はクラリスに詫びると、ブースを出て電話を取った。

『もしもし。ブース？クラリスとは合流したわ。心配しないで』

「すまん、人違いだ」電話の向こうの男が、ダミ声で言った。「あんた、FBIの狭山薫だな？」

「何？日本語？」

「そうとも。わしはインターポールの銭形警部だ。お前さんがクラリス姫の護衛に付いている、と聞いたので、連絡を取ったんだ」

「あの銭形警部？噂は聞いてるわ。でも、LAで何のご用なの？」

「まあ、電話でも何だから、直接お話しをさせて貰おうかな」

電話の声よりも先に直に声が聞こえたので、薫は顔を上げた。ロビーの入口の横にある自販機の所に、トレンチコートを着た厳つい顔の男が立っていた。耳から電話をはずすと、小さく手を振った。

薫が近付くと、銭形は受付に向けて顎をしゃくって見せると、そちらへ歩き出した。

『よう、リンダ、元気か？』

『あら、どうしたのゼニガタ、久し振りじゃない。今回は仕事で？』

『ああ。わしには休みなどないのさ。世界中の悪党共がわしに捕まるのを待ってるからな』

『まあ、大変ね。がんばってね』

リンダはそう言うのと、45APC弾を一箱、銭形に渡した。

「狭山、中で話そう」銭形は薫を促して、ブースの扉を開けた。「内緒話には、好都合な場所だ。姫への挨拶は、その後でいい」

二人はブースへ入ると、何食わぬ顔で射撃を始めた。薫は自前のシグ・ザウエルP220、銭形はコルト・ガバメント1911Aである。

「で、インターポールの敏腕警部が、何の御用なの？」

「LAPDにクラリス姫誘拐の予告状が来た」

銭形は短刀直入に言った。

「何やて？」

「それも、『ルパン三世』を名乗って、だ」

「ああ。それで、あなたの出勤って訳やね。それにしても、LAに来るのが早ない？」

「たまたま、サンディエゴの海軍基地で、海兵達、確か海軍特殊コマンドとか言ったかな、奴らに徒手格闘を指導していたんでな」

海軍特殊コマンドと言えば、米軍内でも精鋭部隊である。その教官を勤めるには、それ相応の技量が必要になるまい。

（何よ。噂で聞くより腕利きやないの）

薫は考えたが、口には出さなかつた。

「まあ、明らかなニセ物だがな」銭形は口をへの字にした。「それよりも、わざわざ予告

を出した、というのが気に食わん」

「どう言う事？」

「本気で姫をかどわかしたいのなら、予告などせずに、すぐにも実行すれば良い。だいたい、ルパンを名乗るなど、リスクしかなかるう」

「つまり、何か裏があると？」

「ほう。中々鋭いな、あんた。大阪府警で、『ヤクザ狩りの女』と呼ばれたのも伊達じゃないな」

「昔の話しや。それより、よう知ってはるなそんな事」

「姫を護衛する人間だ。信頼出来る者かどうか、知らねばな」

「で、警部としては、どう考えてはるの？」

「今回の誘拐予告は陽動で、この犯人グループの背後に、別の目的を持った犯人グループがいる、と考えている」

「今、グループ言いました？」

「ああ。ルパン三世を名乗る時点で、四人組である事は明白だ。四人組を操るのが一人とは考えにくい。まあそんなトコだ。わしは、予告犯と同時に黒幕も調べてみる」

「私達はどないしたらいい？」

「明日は予定通りに動いたらいい。UCLAなら、犯人も迂闊には動けまい。わしは明

日は勝手に行動するから、気にするな」

銭形が振り向くと、桐生達が集まっていた。クラリスが一步前に入る。

『ゼニガタさん、お久し振りです。また逢えて嬉しいわ』

『わしもですよ。こんな事情でなければもっと楽しかったでしょうな』

『こんな事情?』

『ああ。ちよつと場所を変えようか。結構へビーな話しなんでな』

銭形は、少し表情を引き締めた。

ここ「ロサンゼルス・ガン・クラブ」は、工場の建物を利用したインドアレンジなので、実際に利用しているのは全敷地の半分程度である。受付カウンター裏は、薬莖に火薬を詰めて弾頭をはめ込む「リローダー」と、作業用のデスクや棚、そしてスタッフの休憩用のテーブルと椅子以外には何も無い、ガランとした空間である。そのテーブルに、クラリスを上座として桐生、遙、花、薫、サラ、そして銭形が揃って席に着いた。テーブルには、銭形がリンダに頼んでおいた「ピザ・カリフォルニア」と、紙コップのアメリカン・コーヒーが並んでいる。

『凄い! デリバリーのアメリカン・ピザを食べるの、初めて!』

クラリスが瞳を輝かせて言った。

『私もあんまり食べないわね』

サラも物珍しそうにピザを見ながら言う。

「さすが、セレブは違うわ」花が遥に囁いた。「私達なんか、おサイフと相談しながら食べるかどうか考えるのにな」

「私なんか、アサガオの皆の栄養バランスを考えてたら、宅配ピザなんか頼めないよ」
遥が主婦のような発言をする。

『あー、諸君。良く聞いてくれ』銭形は英語で切り出した。『今朝、LAPDにブラックメールが届いた。内容は、クラリス姫の誘拐。差出人は、ルパン三世』

『まあ』

クラリスは目を丸くした。

『姫はもうお分かりと思うが、これはニセ物だ。ルパンがクラリス姫を誘拐の対象にする訳がない。だが、今の段階では犯人の特定は出来ない。なので、姫には申し訳ないが、明日は予定通りに行動する事によって、犯人を炙り出す事を協力して欲しい』

つづく

20180214

註：

『トリビアの泉』

タモリが司会の番組。その中の『トリビアの種』というコーナーで、「日本刀V.S.ピストル」というのをやっていた。

ワルサーPPK—S

ジェームズ・ボンドの愛銃として有名。

スタームルガー・レッドホーク・44マグナム

世界一頑丈な、44マグナムとして有名。

して有名。

デザート・イーグル・44マグナム

イスラエルの、ハイパワーマグナムオートとして有名。『ニキータ』や『ロボコップ』で知名度が上がった。

トとして有名。『ニキータ』や『ロボコップ』で知名度が上がった。

S & W M—29・44マグナム

『ダーティハリー』で爆発的人気を博した。

A U T O M A G・44マグナム

やはり火付け役は、クリント・イーストウッド。

ド。

ワルサーP38

ルパン三世の愛銃として名高い。

S & W M 27コンバットマグナム

次元大介の愛銃として名高い。

シグ・ザウエルP220

世界各国で用いられる名銃。

コルト・ガバメント1911A

世界一とも称される名銃。銭形の愛銃。

その4

VACANCIES IN LOS ANGELS

第二章 カリフォルニアの青い空

「4」

『姫には申し訳ないが、明日は予定通りに行動する事によって、犯人を炙り出す事を協力して欲しい』

銭形は、クラリスにそう提案した。

『ちよつと待つて!』

それに、薫とサラが口を揃えて嘯み付いた。

『あんた、クラリスをデコイにしようつての?』

「警部、クラリスを囮にしようとしてはるんですか?」

二人して凄いい剣幕で銭形に詰め寄る。

『まあ待て』 銭形は澄ましたものだ。『どのみち、相手は接触して来る。こちらの防御如何によって、その方法は変わって来るだろうが、それは変わらん。しかも敵は全くの正

体不明だ。一応、公国へそれとなく探りを入れてみたが、特に脅迫されたような様子もなかった。だから、この予告の目的すら判らんのだ。ならば、向こうさんから接触して来るのを待つしかあるまい。勿論、こちらの準備は万端整えておく。言うなれば拠点防衛だ。相手方の全てを跳ね返し、クラリス姫という本丸を守る。これが作戦だ。どうだ？』

「要は、クラリス姫を守り切れば良い訳だな」

桐生が腕組みをして言った。

「その通りだ、”堂島の龍”こと桐生一馬」

「俺の事を知ってるのか？」

「あんた程の有名人になるとな、埼玉県警にも名前は轟いているぜ四代目」

銭形はニヤリとした。

「成る程、食えねえ男だな」

桐生もニヤリとする。

『私は構いませんよ』クラリスは笑顔で言った。『元々、私のわがままから始まった事です。出来る事があれば、何でもします。皆さんには迷惑を掛けますが、どうかよろしくお願いします』

クラリスは丁寧に頭を下げた。

『ちよつと、やめてよクラリス。そんな事しなくても、私があなたをちゃんと守つてあげるわ』

サラが立ち上がり、胸を張った。

『悪いけど、それはあたしの台詞だから』

薫も立ち上がる。

『私達は応援でいいわよね？』

花が遠慮がちに言った。

『ご免なさいね、ハナ、ハルカ。こんな事に巻き込んでしまつて』

クラリスが済まなそうに眉をひそめた。

「大丈夫よ」 遥は微笑みながら言った。「おじさんと一緒にいれば、良くある事だし」

『まあ、そうなの？』

クラリスは驚いて身を乗り出した。

「うん。おじさんの武勇伝を話したら、夜が明けちゃうかも」

『それはとても興味があるわ。また後で聞かせてもらっても良い？』

「うん」

クラリスと遥は、逆境を生き抜いて来た者同士の、何か他人には判らぬ心の共鳴があるのか、いつの間にかもの凄く親しくなっていた。

『とにかく、明日は正念場だ』銭形は厳しい表情をして見せた。『恐らく、明日のUCL Aへの訪問は、敵は既に情報を得ている筈だ。気を抜かないよう、厳重に警戒してくれ』薫とサラは大きく頷いた。桐生も腕を組み、かすかに頷いた。

『ところで、クラリス姫は今日はどこで泊まる予定なんだね?』

銭形の質問に、サラが答えた。

『ブライアント財閥に縁のあるホテルを押さえてあるけど』

『ねえサラ、私、ハルカやハナと一緒にいたいんだけど、ダメかしら?』

クラリスがそう切り出すと、銭形は目を細めて考え込んだ。

『わしとしては、全員が近くにいる方が目が届いて助かるが』

銭形がそう言うと、サラはすぐにスマホを取り出した。

『クドー、ちよつといい?クラリスの宿の件なんだけど…』

サラが電話をしている間に、クラリスは遙に微笑みかけた。

『今日、早速カズマの武勇伝を聞かせてくれる?』

『うん。いいよ』

遙も満面の笑顔で答えた。

ミヤコホテルへ帰って来ると、ホテルの支配人がクラリスを出迎えた。クドーの手配で、大仰な出迎えは控えられたが、支配人と取締役の二人がエスコートし、サラが引い

て来たクラリスの荷物は、ポーター長が恭しく頂いた。

クラリスは最上階のスイートルームに通されると、すぐに動き易い服に着替えて、遥と花、桐生、薫、サラ、銭形も含め全員を部屋に呼び寄せた。

『どうしたの、クラリス。何かあった？』

そう心配げに尋ねたサラに、クラリスは明るい笑顔で言った。

『だって、みんな、さっき「ガン・クラブ」でピザを食ただけでしょ？おなか減ってない？実は私、おなかペコペコなの。でも、どうせ食事をするなら、一人よりみんなと一緒にの方が美味しいし、楽しいでしょ』

「それで呼んでくれたの？」

『そうよ、ハルカ。それに』クラリスは銭形に視線を向けた。『みんなが揃っている方が、都合が良い事もあるんじゃない？』

『確かに』銭形は頷いた。『これなら、全員を把握出来て、警護もし易いな』

『ハルカには一杯話しをして貰わなくちゃ』

クラリスはそう言って、遙にウインクをした。

「何だか楽しくなってきたね」遙は桐生を見ながら言った。「一杯色んな事、話しちゃうよ」

「銭形にも聞かせるのか、俺の話を」

桐生は苦笑した。

「気にするな」銭形は笑った。「お前さんの事は、調書レベルでなら把握済みだ。それにわしは四課じゃねえから、別に何とも思わねえぜ」

「俺は堅気だぜ」

「判つてるよ」

『さて、ではクラリス、今からどうする?』

薫が桐生と銭形を押さえるように尋ねた。

『そうね。今日は、普段はあまり食べない物を食べてみたいの。スシとか、カラアゲとか

?』

『判つた。まかせて』サラが薫に合図をしながら言った。『ホントに、普段なら絶対に食べられないようなものをチョイスしてあげる』

サラは内線でコンシエルジュを呼び出すと、薫と二人でこと細かに注文を出した。日系人のコンシエルジュは、それを聞いて、ニヤリとしながら親指を立てた。

ややあつて、握り寿司と巻き寿司の桶、春巻や唐揚げ、牛肉とブロッコリーのオイスターソース炒め等の盛られたプラスチック皿、ひと口大に切られたチリタコスなどがテーブルに並んだ。チャーハンと焼きそばは、わざわざ一人前ずつ白い紙箱に分けられている。ドリンクはオレンジジュースとバドワイザー缶とルートビア缶である。

「あ、この箱、ドラマで見た事ある！」

遙と花は同時に喜声を上げた。

「アメリカでは、中華のケータリングはこれが定番やで」

薫が笑って言った。

「かなりジャンキーな感じで纏まったな」

桐生はバドワイザーを手元に引き寄せながら言った。

『そんな事言ってるけど、好きなんですよ、こういうの』

サラが片眉を上げて言った。

「まあな。俺はこういう食い物で育った」

薫の翻訳を聞いて、桐生は答えた。

『まあ、凄いわ！何て美味しそうなんでしょう！』

一番はしゃいでいるのは、やはりクラリスであった。

『ところで、これはなあに？』

クラリスは、全員の前にあるカップを覗き込んだ。中に粉っぽいキューブが入っている。

『それは、フリーズドライのミソスープ。日本のインスタントフードよ。お湯が沸いたら作るわ』

薫が答える間に、サラが缶ビールを配った。遙もルートビアを渡された。

「これ、アルコール分一パーセント未満だから、大丈夫やで」

薫が笑って言う、遙は楽しみに受け取った。

全員にドリンクが行き渡った所で、クラリスが立ち上がった。皆も合わせて立ち上がる。

『今日の、この出逢いは、きつととても大切なものになります』クラリスは晴れやかな顔で言った。『大いに楽しみましょう。カンパイ！』

「カンパイ」は日本語だった。

皆、特に女子達は大いに呑んで、食べて、そしてお喋りをした。遙は約束通り、桐生の「百億事件」からクラリスに話して聞かせた。サラは勿論、花も昔の話は噂でしか知らない、遙の話に食い付いていた。

武勇伝が一段落すると、サラは桐生の隣りにやって来た。

『ねえカズマ、ちよつとイイ？』サラは、薫の抗議の視線を無視した。『ヤクザって、マシヤルアーツも練習するの？』

「それぞれだ。俺は強くなりたかったから、子供の頃に近所のおっさんに教えて貰った」

『コマキリユウ？』

「それは、神室町で、押し掛け師匠に教わったんだ」

『トオシって言うんだっけ、あれ凄かったわ。もう一度見せてくれない？』

「見せる？ どうやって？」

『私に当てて見せてよ』

「覚えてたてだから、手加減出来ねえぜ」

『大丈夫よ』

そこまで言われて、桐生は立ち上がった。

「薫、電話帳を取ってきてくれ」

薫がサラにイエローページを渡すと、桐生はそれを腹に当てさせた。

「これくらい厚けりゃ大丈夫か」

桐生はそう言うと、拳をイエローページに当てた。

「いいか、いくぞ」

『いつでもどうぞ』

「フンッ！」

桐生の体が振るえたように見えた。サラの足が少し浮く。

「大丈夫か？」

少し膝が落ちたサラに、桐生が思わず手を伸ばす。

サラは桐生の手を引き、膝を伸ばす勢いで桐生に抱きついた。

『思ったより効いたわ。あなた、強いよね』

桐生の耳元で吐息まじりに囁くサラの言葉を、薫は訳さなかった。

『ちよつと、サラ。カズマから離れなさい』

薫の目がちよつと恐い。

『どうしたの？フツツのスキンシップじゃない』

サラは艶っぽい表情で笑った。

『ウソつき。思いつ切り発情してるじゃないの』

薫が噛み付いた所で、頬を桜色に染めたクラリスが立ち上がった。

『ねえサラ、ちよつとイイ？』

クラリスは言いながら、サラに左手を伸ばした。そのスピードと鋭さに、サラは咄嗟にパクサオで払おうとした。しかしサラの左手は空を切った。その手で右耳を触る。耳に付けていたイヤークフが無くなっていった。

『不意打ちだったけど、ようやくサラから一本取れたわ』

笑いながら言うクラリスの左手に、サラのイヤークフがあった。サラは目を丸くして、クラリスを見た。

『ほほう、凄いいじゃないか姫さま』

銭形がビールをあおりながら言った。

『これでも、十年以上クラヴ・マガは続けてますのよ』

クラリスはおしとやかに笑った。

「クラリスさんすごい！」

そう言う遙に、クラリスは微笑み返した。

『私も、少しでも備えておかないと。皆に頼ってばかりはいられないもの』

『それだけ鍛えたんなら、ヤツに盗まれた物も取り返せるんじゃないか？』

銭形は意味深な表情で言った。

『ううん、いいの。あれはもうあの人にあげたんだから』

クラリスも意味深な表情で返した。

つづく

20180223

註：

クドー サラの手下。『猛龍過江 WAY OF THE DRAGO

N』にちよつとだけ出て来ます（笑）。

近所のおっさん

雑古哲男の事。詳しくは『龍が如く クロスオーバーシ

リーズ 第一話 昔話』を、ご参照下さい（笑）。

クラヴ・マガ 20世紀前半、戦火が絶えなかつたイスラエルで考案された近接格闘術で、一切の無駄を省いたシンプルかつ合理的な格闘技であることから、様々なイスラエル保安部隊に採用されることで洗練され、現在、世界中の軍・警察関係者や一般市民にも広まっている。（ウイキペディアより抜粋）

創始者 イミールヒテンフェルド

「カリフォルニアの青い空」 It Never Rains In South
ern California アルバート・ハモンド 1972年

第三章 カリフォルニア・コネクション

その1

VACANCES IN LOS ANGELS

第三章 カリフォルニア・コネクション

〔1〕

楽しい晚餐から一夜明けて、クラリスは何も憂いのない晴れやかな表情で、レストラ
ン多間に現れた。

『おはよう』

クラリスは既に席に着いている遙達に声を掛けた。優雅な態度が板に付いている。

「おはよう、クラリス」

遙が元気に挨拶を返した。既に口の中に卵が入っている花が、モゴモゴと挨拶する。
サラは朝食はプロテインだけなので、窓際のカウンターで水を飲んでい。クラリスは
クスリと笑いながら、遙達のテーブルに着く。

『ハルカは何を食べているの?』

「今日は目玉焼きにしたの。花ちゃんは茹で玉子」

『じゃあ、私もサニー・サイド・アップで』

クラリスは、すぐに出て来たトーストに玉子を乗せると、ガブリと齒を立てた。こんがり焼けたパンの耳が、乾いた音を立てる。

『ちよつとはしたないかしら。ふふふ』

クラリスは楽しそうに笑った。

そんな彼女達を喫煙所から見ながら、銭形が口を開いた。

「姫は気丈に振る舞ってはいるが、当然不安もあるはずだ。わしらが盾になっても、姫の身をお守りせねばならん」

「ええ」

薫も表情を引き締めた。

桐生は黙ってタバコをくゆらせた。

クラリスは桐生、遙、花と共に薫のタホに乗り込み、サラはバイパー、銭形は自分のブジョーで、UC LA へ向かった。

UC LA、則ちカリフォルニア大学ロサンゼルス校は、ウエストハリウッドにキャンパスを持ち、四百エーカーを越える広さを誇る。

この学内にあるロイス・ホールの大講堂で、ワシントンDCのジェファソニアン法医

学研究所の研究員である、テンペランス・ブレナン博士の講演会が行われる。自身をモデルにした小説がベスト・セラーとなった事で、世の人々の法人類学に対する関心を高めた功労者である。それに注目した医学部の教授のプロデュースで、今回の講演会が実現したのである。

現場に残された遺体、そして微細な残留物から証拠を見付け出し、数々の難事件を解決に導いたジェファソニアチームの活躍の知名度もあり、千八百人を収容出来るロイス・ホールは、立ち見が出る程の大盛況である。

そんな中で、VIP席が四席取られていた。サラが、ブライアント財閥の力で押さえていたのである。既に他のVIP席には、教授クラスの重鎮達が座っている。

「クラリスはあそこに座るんだね」

無邪気にそう言う遥に、クラリスは微笑みかけた。

『あなた達も座るのよ、ハルカ、ハナ』

「えっ？」 遥は目を丸くした。「薫さんじゃないの？」

「あたしは警護だから」

「銭形警部は？」

「わしも見張りだ」

「おじさんは…、興味ないか、こういうの」

「良く判つてゐるじゃないか」

という訳で、遙はクラリスと共にVIP席に着いた。目を見張る程の白人美女二人と、東洋人二人が最も良い席に座る様子は、会場内でも一際目立ち、ロイス・ホール内は憶測の囁きで満たされた。

程なく時間となり、舞台上にテンペランス・ブレナン博士が現れた。彼女は演台の椅子に腰掛けると、そこから客席に向かつて手を振った。クラリスとサラが手を振り返したのを見て、会場の全員が、「博士の知人」という事で自らの好奇心を納得させた。ブレナン博士も美女として有名である。美女の友は美女、という不公平な真実を認めるしかなかったのだ。

ロイス・ホールの大講堂内を見渡せる場所に、桐生はいた。六ヶ所ほどある出入口がある程度見て取れる。聴衆は、ブレナン博士の講演を集中して聞いている。立ち見の者も例外ではない。この中では、クラリスに近付くのは容易ではない。立つて歩くだけで見立ってしまう。

まあ、この講演会の間だけでも、ある程度安全は保たれるだろう。

桐生はそう考えつつも、会場内を見張る事は怠らなかつた。

会場外、大講堂の正面出入口には薫がいた。他の出入口はホール正面入口経由なので、とりあえずここを押さえておけば良い。一番見張りが難しいのは、表だ。

その表には、銭形がいた。火の付いていないタバコを唇にはさんだまま、キャンパスに気を配る。キャンパスは、大勢の学生達が行き来している。

一時間半ほど様子を見ていた銭形は、同じ若い男が三回ほど前を通り過ぎたのを見逃さなかった。

特に見立った動きをする訳でもなく、ロイス・ホールにちらりと自然に目を向けるだけで、近付きもせず通るだけ。

三回目に通り過ぎる時に、銭形は彼に近付いた。

『すまない、ちよつといいか?』銭形はIDを見せながら声を掛けた。『わしはインターポールの銭形だ。少し確認したい事があるんだが…』

『俺には別に用はないけど』

無意味に素気ない態度と、不安定に視線を泳がせる様子に、銭形は不審なものを感じた。

『済まん、わしには用があつてな』銭形はあえて食い下がった。『このキャンパス内で、不審な男を見なかったか?猿面でがに股の、下品な男なんだが』

『そんな奴は知らない』

男はぎこちなく答えたが、銭形は男が無意識に見た方向を確認した。キャンパス内の道路脇に停めたファイアットに、男二人、女一人が乗っている。

あからさまな容疑者だな。

銭形はニヤリとしたが、すぐに引き退がった。

『そうか。悪かったな』

銭形はそそくさと立ち去る男を見送って、肩をすくめた。

容疑者なのはいいが、想像以上の素人だな。

口の中で銭形は呟いた。

それから程なく、ファイアットの所に先程の男が合流し、車に乗り込んだ。

「不注意にも程があるな」

銭形は思わず口に出して言った。彼らは、銭形に気付かれた事も、疑われている事も、ましてや監視されている事すらも気付いていない。

「ズブの素人じゃあないか」

銭形は肩をすくめた。そんな彼の前を、四人の乗ったファイアットが通り過ぎた。運転している男が、サングラス越しに挑戦的な視線を向けて来た。銭形はあえて正面からそれを受けつつ、やんわりとスルーした。男は小さく肩をすくめて、走り去って行った。

この時、銭形は少し嫌な予感がしたのだが、あまりに弱い感覚だったので、気のせいだと思ふ事にした。

ブレナン博士の講演会は大成功を収めた。実際の解決事件を例に取った法人類学的

な検証は興味深く、何より臨場感があった。質疑応答が長引き、予定よりも一時間遅く終了した。

出口へ向かう聴衆の流れに逆らい、クラリス一行は楽屋裏、ブレナン博士の控え室に向かった。

サラが先頭に立って警備員と話しをつけると、ノックをしてドアを開けた。

『まあ、サラ、久し振りね』

ブレナンは笑顔で言った。そして、その笑顔をクラリスにも向けた。

『公女さま、お元気？』

『ありがとう。元気です。大変興味深いお話で、楽しかったわ』

『それは何より』

ブレナンはそこまで言って、クラリスの後ろにいる遙と花に気付いた。

『その二人は？骨格的に典型的な東洋人だけど。日本人？』

『そうよ。私の新しいお友達、ハルカとハナよ』

クラリスはにこやかに二人を紹介した。

『初めまして。遙といいます。すごいお話ばかりで、驚いちゃった』

『楽しんでもらえた？』

『はい』

大きく頷く遙を見て、ブレナンは微笑んだ。

『で、あなたは英語が上手ね?』

『あ、初めまして、花です。遙の友人って事で、一緒に来ました』

『そう。あなた、ちよつと太ってるけど、筋肉の付き方が良いわね。アイキドーか何かやってる?』

『ええ。合気道はたしなむ程度に。太ってる、は大きなお世話です』

花は、少し怯んだが、負けずに答えた。

『ハナ、ご免ね。テンペって、思った事を何でも口に出しちゃうから』

サラが悪びれずに言う。

『サラさんの言い方も、どうかと思いますよ』

花は、笑いを顔に貼り付けて呟いた。

『他にまだいたわね、お友達』ブレナンはクラリスに言った。『一人は、確かFBIで見た事あるわ。カオルだったかな。あと男二人。彼らは紹介してくれないの?』

『使いの者を走らせたから、じきに来てくれると思うわ』

サラは頷きながら言った。

程なく、辺りを検索しつつ、薫と桐生、銭形がやって来た。

『ブレナン博士、お久し振り』

『カオル、本当にお久し振りね。サイバー部門で活躍してるって、ブースが言ってたわ』
ブレナンはそう言ってから、まじまじと桐生を見た。

『凄い身体ね。闘う為だけに鍛え上げられてる感じ。あなたは誰?』

「桐生一馬だ」

『カズマ。カオルのステディ?』

『そうよ。だから、味見はなしにしてね、ブレナン博士』

『あん、カオルに先手打たれちゃった』

『する気だったの?』

サラが肩をすくめた。

『ところで、お忍びで私の講演を聴きに来たにしては、警戒が厳重じゃない? 警部(キャプテン)・ゼニガタ』ブレナンの青い瞳が銭形を見た。『公女さまに何かあったの?』

『さすがはFBIに捜査協力しているだけはある。わしの事もご存知か』銭形は真顔で言った。『それならば話しは早い。キッドナツプの予告でな。それらしい奴も見かけた』

「何やて!?!」

薫は思わず日本語で言ってしまった。

『ただな、悪党ごっここの素人だ。奴らは恐るるに足らん。警戒を怠らなければな』

『やっぱりルパンじゃなかったの?』

サラが訝しげに尋ねた。

『似ても似つかぬ四人組だ。向こうもわしの事は知らぬようだったから、まだデビューしたてのルーキーかも知れん。わしは存外悪党には顔が売れているからな』

銭形はそう言つて唇をゆがめた。

「何でその時に呼んでくれへんかってん?」

薫がなじるように銭形に言つた。

「その時は、まだ持ち場を離れるタイミングじゃなかったからだ」

銭形はさらつと答えた。

『とにかく、公女さまが狙われているつて訳なのね』

花から事のあらましを聞いた、ブレナンが大きく頷きながら言つた。

『そう言う事だ』

『じゃあ、とりあえずランチに行きましよう。腹が減つては何とかつて言うでしょ? 予約してあるから、他に客はいないわ』

ブレナンはそう言つて、銭形にウインクして見せた。

つづく

20180319

註：

トーストに玉子を乗せると：

ズーとシータがやっている（笑）。

俗に言う（？）「ラピユタスタイル」。パ

その2

VACANCES IN LOS ANGELS

第三章 カリフォルニア・コネクション

〔2〕

ビバリーヒルズ・ホテルの少し東、ノース・ビバリー・ドライブを入って、レキシントン・ロードを越えた所に、一軒の邸宅がある。噴水を中心としたロータリー風のエンランスを持つ、一見普通の住宅だが、ここは知る人ぞ知るセレブご用達の高級レストランである。所謂「アメリカン・フレンチ」を提供するのは、パリの一流レストランで修行した日本人のシェフである。特に看板を掲げる事もなく、広告を打つ訳でもなく、口コミだけで今や政府要人やハリウッドスターも予約待ちの高級店となったのである。屋号も特にないので、シェフの鳴海（ナルミ）廣人（ヒロト）の名を取って「ナルミ」と呼ばれている。

スーツ姿の白人男性に誘導されて邸内に入ると、中も豪華なりビングといった感じで、レストランのイメージはない。

『ここは、以前私の本のミリオン記念で、出版社が招待してくれて、来た事があるの』
ブレナンが、クラリスを促して上座に案内した。シェフ自らが椅子を引いて、クラリスを掛けさせる。

『こんにちは、ナルミシエフ』サラが親しげに声を掛けた。『今日はよろしくね』
『サラさん、いつもお世話になっております』

鳴海が丁寧に頭を下げた。

『ここは、ブライアント家の行きつけのキッチンなの』

サラが事もなげに言う。

『ブライアント家の皆様には、開店以来からのお付き合いを頂いていますから』

『その長いお付き合いに免じて、ちよつとお願いがあるんだけど』

さすがに少し言いづらそうに、サラが切り出した。

『何なりと』鳴海は笑顔で答えた。『外ならぬ、サラさんのお願いだ。遠慮なくどうぞ』

和やかに食事が始まった。アメリカン・フレンチとはいえ、板前から修行を始めた鳴海は、適度に和食を狭んで献立を組み立てて行く。カルパッチョではなく刺身だったり、パスタではなく蕎麦だったり、既に和食が恋しくなっている遥と花には、嬉しいメニユーだった。

中休みの茶碗蒸しを口に運びながら、薫が口を開いた。

『クラリス、ちよつといい？ルパン三世つて、どんな人なの？』

『カオル、ナイスな質問』ブレナンがそれに食い付いた。『噂には色々聞くけど、逆に色々ありすぎて、実像がプロファイリングしづらいのよ。本人を知ってるクラリスから見ても、”快盗ルパン三世”とは、何者なのか、教えてもらえる？』

その質問に、クラリスは穏やかな微笑を浮かべた。

『ふふ、いつ聞かれるかと思つてたけど。ただ、私も彼の全てを知っている訳ではないわ。一九七九年のあの時、たった七日間だけの出逢いでしかなかったのだから』

そう言いつつ、クラリスの頬が紅く染まった。

『でも、大切な人なんですよ？』

ブレナンに言われて、クラリスははつきりと頷いた。

『ええ。おじさまは、傷付きながらも、私の為に戦つて下さったの。本人が聞いたら、茶化してしまうでしょうけど、私にとっては、悪い魔法使いから救い出してくれた、白馬の王子様なの』

その言葉を聞いて、銭形は小さく笑つたが、何も言わなかった。クラリスは、そんな銭形を見て、微笑みながら言葉を継いだ。

『おじさまは、優しく、紳士的で、心細やかで、クールで、ひょうきんで、セクシーで、シャイで、そして誇り高い人』

「もしかして、クラリスの初恋の人？」

遙が身を乗り出すように尋ねた。クラリスは、遙に顔を向けて、晴れやかな笑顔を見せた。

『ええ、そうね。私の初めてで、唯一の心から愛した人』

その言葉に、遙は憧れの表情を向けて、大きく頷いた。

そんな遙を見て、桐生が不粹に尋ねた。

「何だ、遙、お前にもそんな男がいるのか？」

それを聞いて、遙は耳まで赤くなった。すかさず、薫が桐生の肩を肘で小突いた。

「野暮やなあ。一馬が一番言うたらあかんセリフやでそれ」

その時、サラのスマホが鳴って、すぐ切れた。表示はクドーである。サラは、銭形と桐生に目配せをする。二人は同時にワインを飲み干し、席を立った。

サーモンのムニエルを食べて、神戸牛のステーキを頬ばった所で、急に電気が消えた。まだ陽は高いので真っ暗にはならない。

裏口をこじ開ける音がして、乱暴な足音と共に、四人の男女が踏み込んで来た。

『申し訳ないが、みんな、手を挙げてもらおうか』

リーダーらしい男が、ベレッタF9を突き付けながら言った。他の三人も、てんでに銃を向ける。しかし、リーダー以外は銃の扱いに慣れていないらしく、構えも動きもた

どたどしい。正規の訓練を受けているクラリス達は、むしろ危なっかしくて見ていられない。クラリス、薫、サラは思わず漏れる笑いを隠す為にうつむいてしまい、結果として誰一人動かなかった。

『どうした、ビビって動く事も出来ねえのか?』知ってか知らずか、男が居丈高に言う。『判つてると思うが、俺はルパンだ。予告通り、クラリスにはご同行頂きたいんだが…』男は言いつつ、クラリス、ブレナン、遙、花、サラ、薫の順に目を移した。一端通り過ぎた目線がブレナンに戻って止まった。

『さあ、クラリス、一緒に来てもらおう』

『あら、光栄ね。でもご遠慮するわ。私、クラリスじゃないし』

ブレナンが答えたのと同時に、男と女の悲鳴がした。

『どうした?』

男が問うのと、照明が点くのは同時だった。

自称『ルパン一味』の二人が、銃を取り落して呻いていた。その横に、桐生と銭形が立っていた。

『お前ら、いくら何でもひどすぎるぜ』銭形は苦笑した。『クラリス姫の顔も知らないで、よくルパンを騙ろうと思ったな』

『お前は何者だ?』

『やはりわしの顔も知らんのか』銭形は肩をすくめた。『わしはインターポールの銭形だ。本物のルパンとは浅からぬ因縁がある者だ。今のわしは、お前らを逮捕する権限も持っているぞ』

『やかましい！』

男は銃を銭形に向けた。その銃を、薫が叩き落とした。もう一人は、サラに武装解除された。

『何よこのコ達、本当に素人じゃない』

サラが腰に手を当て、力なく座り込む男を見下ろした。後から部屋に入って来たクドーが、一人ずつ後ろ手にさせて、手首と親指を結束バンドで括った。

四人を一ヶ所に集めて床に座らせると、銭形は『ルパン』の前に立った。

『一応、アメリカからしく、権利を読み上げてやろう。お前らには黙秘権がある。お前らの証言は、裁判で不利になる事もある。お前らは弁護士を雇う事が出来る。雇う金がなければ、公選弁護士を呼ぶ事が出来る。…だったかな』

『何か、海外刑事ドラマみたいな感じだね』

『ミランダ警告って奴ね』

遙と花は、そんな呑気な事を言っている。

『で、ルパンくんとやら』銭形は嫌味たっぷりに呼び掛けた。『聞かせて貰おうか。先ず

は名前と、生い立ちから』

『生い立ち?』

薫が怪訝な顔をした。

『こいつらがなぜ犯罪に手を染めてしまったのか、興味があつてな』

銭形は、『ルパン』とその一味をねめつけながら言った。その手に、サラが一味の運転免許を渡す。クドーが回収したものだ。

『フザケてるわね、コイツら』

サラが肩をすくめて言った。銭形を見ると、その運転免許は偽造で、それぞれ『カーク』『スポック』『マツコイ』『チャペル』という名前になっていた。

『“スタートレック”かよ』銭形は鼻で笑った。『犯罪者を気取るなら、“ジャック・スパロウ”とか“ルフィ”の方が良かったんじゃないやねえか?』

ルパン改めカークは、無然として口を開かない。

『本名を言う気がないなら、それでいい。そんな事は後でも判る』銭形はカークの前にしゃがみ込んだ。『お前らに、ルパンを名乗らせて、クラリス誘拐をそそのかしたのは、誰なんだ?』

カークは気丈に銭形を睨むと、小さく笑った。

『何が可笑しい?』

『俺達が簡単に吐くとも思ってるのか？そんなに甘くはねえぜ、ゼニガタさんよ』
カークはそう言って足をだらしなく投げ出した。

「いつの間に、『ルパン一味』が『エンタープライズ号のメインクルー』になっちまったんだ？」

言いながら、桐生がカークに近付いた。それを見て、銭形が立ち上がって一歩退く。

「薫、俺の言う事をカークに訳してくれ」

桐生は振り向きながら言う、またカークに向き直った。

「お前らのボスは誰だ？」

カークは何も答えない。

「黙秘か、いいぜそれでも。ただ、俺はインターポールで警察官の銭形とは違う。元ヤクザだ」

『ヤクザ』という単語に、カークばかりでなく、他の三人も反応した。

「ヤクザだった俺には、銭形のように警察としての制約もないし、一般人のようにお前らに気を使う必要性も感じない。聞きたい事は、拷問してでも聞き出すぜ」

薫が「torture（拷問）」の部分強調して通訳した。スポックとマツコイ、チャペルの三人は既に怖じ気づいている。が、カークは踏んばった。

『俺を誰だと思ってるんだ。いずれ闇社会を牛耳る…』

桐生は皆まで聞かず、カークの頬を右手で張り飛ばした。

「うるせえ。俺達はお前らの悪党ごっこに付き合うほどヒマじゃねえんだ。誰に雇われたんだ？ 言えよ」

今度は左手で張った。唇が切れ、血を滲ませたカークが口を開く前に、右側頭部をはたく。パンと大きな音がする。更に左側頭部。頭頂、後頭部を、ほぼ等間隔で張り続ける。カークが何か言おうとしても、桐生は取り合わず、ひたすら淡々と頭や顔を張り続けた。

『もう止めてくれ!!』

顔が倍くらいに腫れ上がったカークが絶叫した。

「どうした？ もう降参か？ 日本のヤクザならあと五分は頑張るぜ」

桐生は冷酷な表情で言った。どんな脅しよりも、それはカークの心を砕くのに効果的だった。

『言うよ、言うから助けてくれ…』

蚊の鳴くような声で言うカークの前に、再び銭形がしゃがみ込んだ。

『そうかい、自白してくれるのかい。役に立つ証言をしてくれりゃあ、司法取引もあるかも知れねえぜ』

銭形の方が悪党に見える。

とりあえず一段落したらしい様子を見て、遙と花は肩の力を抜く事が出来た。思わず吐息が漏れる。

「こういう事だったんですね、『犯罪者の逮捕に協力して欲しい』って言うお願いの真意は」

遙の隣に立って、鳴海が呟いた。

「何だかご免なさいね、ご迷惑をかけて」

花が頭を下げた。

「いえいえ、中々エキサイティングなイベントでしたよ」

鳴海は笑顔で言った。

この人も尋常じゃないのね。

花は心の中で呟いた。

つづく

20180407

註：

※レストラン ナルミ

全くのフィクションです。

先ずは名前と、生い立ちから

『99・9』の深山のセリフより。

スタートレック

アメリカのTVSFドラマ。「アメリカのレジエンド」で

ある。「カーク」船長、「スポック」副長、「マッコイ」ドクター、「チャペル」ナース。

その3

VACANCES IN LOS ANGELES

第三章 カリフォルニア・コネクション

「3」

『さて、教えて貰おうか』銭形は立ち上がってカークを見下ろした。『お前らは、誰にこんな事を頼まれたんだ?』

『俺達は、この辺りのストリートでデビューしたばかりだ。ハイスクールでやんちゃしてた延長で、ワルになるしか道はなかった。コンビニを襲ったり、ホームレスをいたぶったりしてイキがってた時に、奴が声を掛けて来たんだ』

『奴ってのは?』

『良く知らねえ。ただ、イタリア訛りで、”マフィアの一員だ” って言ったんだ。奴の仕事を手伝えば、今後バックアップしてくれるって』

『そんな甘言に乗ったのかよ』

銭形はあきれ顔で肩をすくめた。

『良く信じたわね、そんな話』

薫も首をかしげた。

『俺達は、とにかく名を上げたかったんだ。奴は、” やつつけたい奴がいる。そいつに罪を擦り付けたい” って言って、クラリス誘拐を切り出したんだ』

『お前、クラリスがどんな人間か知らなかったのかよ』

『名前ぐらいしか知らなかったよ。で、そのやつつけたい奴つてのが、ルパンだって』

『しかもお前、ルパンすら知らねえで、本気で悪党になる気はあったか？まあ、なかったんだらうな』

銭形は苦笑いの態だ。

『誘拐の理由は” ゴート札の秘密を手に入れる為だ” とか言つとけば良いって』

『そんな裏設定まであったの』

薫とサラは顔を見合わせた。

『でも、ルパン一味を知らない時点で、そんな設定も役立たずだ』銭形は目をすがめた。
『ルパンに恨みを持つている奴か…。そんなモンは” ハマノマサゴ” だな』

『” ハマノマサゴ”？』

サラが首をかしげた。

「浜の真砂は尽きるとも、世にルパン憎し奴は尽きまじ、だ」

銭形は日本語で言った。

『とにかく、ルパンに恨みを持つてる奴は多いって事よ』

薫がざつくりと説明した。

『それって、イシカワ・ゴエモンの言葉のもじりね』

クラリスが微笑みながら言った。

『クラリス、知ってるの?』

『もちろん。十三代石川五右衛門にも助けられましたからね』

『なるほど』

妙に納得して、薫は頷いた。

「イタリアン・マフィアって、ロサンゼルスにもいるのか?」

桐生が腕を組んで首をひねった。

「ニューヨークのイメージがある?」薫が答えた。「彼らはどこにでもおるで。ロス含むしろ、組織犯罪集団の群雄割拠の街やで」

そんな桐生と薫のやり取りを聞きながら、銭形はカークの言葉から生まれた異和感の元を考えていたのだが、やがてある人物像が浮かんで来た。

銭形はもう一度、カークの前にしやがみ込んだ。

『おい、カーク。お前に声を掛けて来たイタリア訛りの男って、角刈りのゴマ塩頭で、左

目に大きな傷があつて、アゴのしゃくれた、デカイ奴じやなかつたか?』

『ああ。その通りの奴だよ。知ってんのかよ』

カークはふて腐れて答えた。

『何よゼニガタ、心当たりがあるの?』

ブレナンの問いに、銭形はしかめ面で頷いた。

『残念ながら、ある』

『誰なの、そいつ』

『奴の特徴が間違つていなければ、元マカローニ一家のアグステイーノデリカリだ』

『デリカリですつて?』

薫が驚きの声を上げた。

『カオル、知ってるの?』

『ええ、ブレナン。デリカリと言えば、最近力を付けて来たギャングの長で、何でも』

『シシリーの狂犬』と呼ばれてるらしいわ』

『あいつ、まだそんな名を使っているのか』銭形は大きく溜め息をついた。『奴はもともと、ルパン帝国の一員だった、マカローニ一家の切り込み隊長だった。ボスのマカローニがルパン二世を裏切り、帝国は壊滅したんだが、その時若手だった奴は、先峰と

なつて殺戮の指揮を執つたんだ。血も涙もない悪魔のような男だ。まあ、マカロー一家は、ルパン三世に復讐されて、全滅したけどな』

銭形は言いつつ、カークに憐れみのこもった目を向けた。

『残念だったな、奴はお前の後ろ盾になどなつてはくれない。むしろ捨て駒だろう。お前は、奴に騙されたんだ』

『そんな…』

カークは打ちひしがれて項垂れた。

『落ち込んでいる所を悪いけど、デリカリの居場所は知らない？』

薫がカークに問い掛けた。カークは無言で首を振る。

『いつも、あつちから連絡があつて、次の行動が決まる、そんな感じだった』

カークに替わつて、スポックが口を開いた。

『プリペイドで番号も非通知だったから、記録も履歴もないわ』

チャペルも口を揃える。

『ゼニガタ、あんたの言う通りだ』マツコイが真顔で言つた。『俺達は騙されていた。今度は俺達の命が狙われるかも知れない。助けてくれ』

『虫の良い話だなあ』銭形は呆れ顔をして見せた。『クラリス姫の被つた精神的・肉体的苦痛を思えば、お前らなどひとからげでアゴ野郎に送り返してやりたい所なんだが…』

銭形はそう言うと、クラリスに目をやった。クラリスは、それに微笑みで答えた。

『姫の寛大なお心で、お前らは警察に引き渡され、法の保護下に置かれる。姫に感謝するんだな』

銭形はそこまで言つて、近くの椅子に座り込んだ。

丁度そのタイミングで、遠くからパトカーのサイレンが聞こえて来た。やがて、パトカー一台と、フォードが一台やつて来て、若い制服警官二人と黒人の老刑事一人が降りて来る。

刑事は『ナルミ』に入ると、広間にいる全員を見渡してから、銭形に向かってバッジを見せながら声を掛けた。

『どうも、ビバリーヒルズ署のアクセルⅡフォォーリーです。通報はあなたからですか？』
花が小さく息を呑むのが判つたのか、フォォーリーは小さく笑つた。

『残念ながら、エディⅡマーフィーじゃないよ、お嬢さん。ついでに言うと、彼はデトロイト市警の刑事だからね』

フォォーリーの答えは慣れた感じがした。何度も同じ説明をしているのだろう。

『インターポールのゼニガタだ。通報通り、予告誘拐の実行犯を逮捕したので、身柄をそちらに預ける。さらに上の組織がいるらしいので、保護してやってくれ』

『上の組織とは？』

『恐らく、アゴステイノーデリーカリの一味だ』

『デリーカリか!』

フォーリーと制服警官達は驚いた。

『奴が誘拐の主謀者だって? 信じられん。奴が人質を取るなどと考えるとは…。奴のモットーは“皆殺し”のハズだ』

『そうね、にわかには信じ難いけど、本当らしいわ』

薫がFBIのIDを示しながら会話に加わった。

『何だ、FBIまで絡んでいるのか』

フォーリーは目を丸くした。

『まあ、対象が重要人物なもので…』

言葉を濁した薫に、フォーリーは肩をすくめて見せた。

『判つてますよ。FBIの捜査には、所轄は手が出せませんからな』

『そう言う訳ではないんだけど…』

『そう卑屈になることはない』銭形はフォーリーの肩を叩いた。『何せ、こちらにおわす、クラリスドリーカロストロ公女が内密に、と仰せなのでな。カオルの心中も察してやってくれ』

『カ、カロストロ公女!』

『声が高い。そう言う訳だからアクセル刑事、是非とも隠密裡に行動してくれ』
「ちよつと銭形警部。何でバラしちゃうん？」

薫は日本語で銭形に文句をつけた。

「どうせコイツらは権威に弱い。この方が言う事を聞かせやすいだろうぜ」

銭形は日本語で返すと、悪そうな笑みを浮かべた。

『なるほど、そう言う事であれば、我々としても協力は惜しみませんぞ』

急に協力的な態度で、フォーリーは言った。

『申し訳ありませんが、よろしくお願ひします』

クラリスもしおらしく頭を下げた。

『いやいや、そんな勿体ない』

公女に直接声を掛けられ、フォーリーは恐縮の態だ。

「クラリスも役者よねえ」

花がポツリと眩いた。

警察関係者達が色々と駆け引きをしている間、少々手持ちぶさただった桐生だったが、ふと耳に入つて来た音が気になった。

いつの間にか近付いて来た、水冷V8ターボディーゼルの低い震動を伴うエンジン音が二台分、彼らのいる『ナルミ』の前で停まった。重たいドアが開いて閉じる。その次

に聞こえた複数の甲高い金属音に、桐生の背は凍りついた。銃の遊底をスライドさせる音だ。

「伏せろっ！襲撃だ！」

桐生は叫ぶと、遙と花に覆いかぶさる様に床に伏せた。銭形がクラリスを、薫がブレナンを伏せさせ、クドーが日本語に反応出来なかったサラを引き倒した。

次の瞬間、部屋中に弾丸がフル・オートで撃ち込まれた。窓という窓は砕け散り、壁を貫通した弾丸が調度品を破壊する。

状況を理解出来ず、棒立ちになっていたフォーリーと制服二人は、被弾して床に倒れた。

少し遅れて状況を把握したサラが、クドーと共に低い姿勢のままクラリス達を奥の厨房へ避難させる。

桐生達は、制服二人を引き摺って壁の陰に放り込んだ。肩などを撃たれたようだが、命に別状はなさそうである。

『何だこれは!?!』

右肩を押さえて、フォーリーがわめいた。血が指の間から溢れている。

『こつちが知りたいよ!』

銭形もわめく。銃撃の音が凄まじい為だ。

しばらくして、銃撃が止んだ。薫が柱の陰から様子を窺うと、カーテンも吹っ飛ばされ、ポツカリと空いた窓から、三人の男達が見えた。二人がM4カービン、一人がMP5を手に行っている。

「おかしい。今の攻撃、三人やなかったはずや」

薫の呟きを聞いて、銭形も頷いた。

「五、六人はいた感じだったがな」

二人のやり取りを聞いた桐生は、素早く厨房に向かった。途中、床に転がっていたカーク達を横目で見てみたが、どうやら無傷であるらしかった。

桐生は、表を警戒しつつ、厨房に入っていった。

つづく

20180416

註：

※マカローニ一家

『ルパン三世』

念力珍作戦』

東宝

197

4 (実写映画) の設定より

エディ＝マーフィーじゃないよ

『ピバリーヒルズ・コップ』1984

パラマ

ウント
を踏まえて。

その4

V A C A N C E S I N L O S A N G E L S

第三章 カリフォルニア・コネクション

〔 4 〕

厨房では、鳴海と料理人達が隅の方に固まって伏せていた。クラリスとブレナンの二人が、遙と花を庇うように立っており、その奥のドアの前に、MP5を持った男二人と、レミントンM870ショットガンを持った男が一人いた。一人はMP5をクドーのど元に突き付けており、もう一人のMP5は鳴海を背にしたサラに、そしてショットガンは、まともにクラリスの胸を狙っていた。

『あんたがクラリス姫だな』

『そう言うあなたは、アゴステイノー||デリ||カリね』

『ほう』デリ||カリは目を見開いた。『お姫様に名を知られているとは、光栄だな』

『たった今知ったばかりですけど』

『まあ何でもいいさ。一緒に来てもらおう』

『お断りします』

クラリスはきつぱりと答えた。

『悪いが、あんたに選択権はねえ。それと、ブレナン博士、あんたも来て貰おうか』

『あら、光栄ね』

ブレナンは肩をすくめた。

『そのヤクザ野郎、動くなよ』

デリ＝カ리는桐生に向かって言った。桐生は英語は判らないが、『フリーズ』は聞き取る事が出来た。

『ブレナン博士は解放して貰えませんか？』

クラリスは気丈に申し出た。

『だめだ』

デリ＝カ리는一蹴すると、銃でクラリスとブレナンを促した。遙はクラリスに付いて歩き出した。

クラリス達の後に一人がついて行き、クドーに銃を突き付けた男が残った。

『動くなよ』

男は言いながら、ドアまで身を退いた。サラがクラリスを追おうと思わず動きかけた。

『動くなっつっつてんだろ』

銃口がサラに向いた時、クドーが飛び掛かった。しかし一瞬早くかわされてしまった。

『バカが』

MP5が火を噴き、クドーが胸を撃たれて倒れた。

『クドーっ！』

サラが叫んで飛び掛かろうと身構えた。

『お前も死にてえのか？』

MP5をサラに向けた男に、桐生が一気に踏み込んだ。男が反応する前に、体当たりの勢いで拳をぶち込んだ。

男は後ろのドアを突き破って外に吹き飛ばされた。肋骨が数本折れたらしく、口から大量の血を吐いて、路上に大の字になった。すぐに飛び出した桐生の目に、クラリスを引き止めようとした遙が、一緒にハマーの中に押し込まれる様子が捉えられた。

「遙！」

怒鳴った桐生に、デリッカリが車内からグロツクを突き付けた。そのグロツクはすぐに倒れている仲間に向けられ、頭を一発で撃ち抜いた。

クラリス、ブレナン、そして遙を乗せたハマー二台は、猛スピードで走り去った。ご

丁寧、タホもバイパーもブジョーも、タイヤはきつちりと撃ち抜かれており、走行不能になっていた。

『おい！ゼニガタ、どういう事だこれはっ！』

ハリウッド署で応急手当を受けている桐生達の所に、テリーⅡハラが怒鳴り込んで来た。まともに撃たれたクドー以外は、ガラスの破片などで小さな傷を負っただけで済んでいた。

『何だい部長、”大丈夫か？”とか”お前らは無事か？”とかはないのか？』

銭形は顔をしかめて言ったが、ハラはそれをスルーした。

『お前は、今回の事はイージーだと言っただろ？それを何だ、警官が撃たれた上に、公女まで誘拐されるとは』

『ニセルパンがイージーだって言っただけだ。まさかデリーⅡカリがバックに付いていたとは』

『言い訳は聞きたくないね。どうするつもりだ？』

『もちろん、行方を突き止めて、救出するわ』

薫が腕の治療に顔をしかめながら言った。

『あんたがFBIのカオルか』ハラは表面を薫に向けた。『FBIがどれほどの権限を持つているかは、今さら確認したくもないが、これ程の大事となつては、我々も動かさ

るを得ない。それは判って貰えるな?」

『ええ、判つてますとも』

『今後、FBIと言えども勝手な行動は控えて貰う。了解したか?』

『はいはい了解』

薫がしぶしぶ答えたのを聞いて、ハラは部屋を出て行った。

薫は立ち上がると、サラの横に立った。サラは、これ以上ない程に憔悴していた。親友であるクラリスとブレナンは囚われ、忠実な部下であるクドーは撃たれて重体である。

『サラ、ご免、私達が付いていながら…』

薫は、サラの肩に手を置いた。サラはその手に自分の手を重ねて、薫を見上げた。今にも泣き出しそうな表情だ。

「桐生さん、どうしよう、遥までさらわれちゃった」

花も落ち着かない表情で言った。

「ああ。だが、殺されずに連れて行かれた、という事は、あのアゴ野郎には、人質が必要な何らかの理由があるんだろう」

「アゴステイーノね」

「アゴ野郎の潜伏先が判れば、奪還も可能なんだがな」桐生は薫に顔を向けた。「薫、何

とか判らないのか？」

「とりあえず、パソコンでも使えたら、まだ捜しようもあるけど……」

薫は肩をすくめた。

そこへ、ダニエルⅡエスピノーザがノートパソコンを持って現れた。

『どうした、ダン』銭形がつっけんどんに尋ねた。『お前、本店の刑事だろ。何しに来た？』

『まだ俺は、ハラ部長からあんたのお目付役の任を解かれていないんでね』

ダニエルは言いつつ、ノートパソコンをデスクに置いた。

『それよりも、これを見てくれ。ついさつき、配信され始めた動画だ』

モニターには、椅子に縛りつけられたクラリスとブレナン、そして遙が写し出されていた。そこに、声だけが流れる。

『俺はルパン三世だ。クラリス姫と、ブレナン博士を誘拐した。カリオストロ公国と、ジェファソニアン研究所に、それぞれ一億ドルを要求する。俺は金に汚いから、ビタ一文まける気はない。三日準備期間をやる。期限を過ぎれば、二人は死ぬ』

動画はそこで終わった。

『何だこりゃあ？』

銭形は呆れ顔で呟いた。

『適当な感じ。偽物である事を隠す気もないのね』

薫も大仰に肩をすくめた。

『ああ、クラリス、可哀想に』サラがモニターを見つめながら言った。『こいつ、さつきのアゴ野郎よね？何が目的なの、こんなマネをして』

『そもそも、一億ドルなんて、最初から取る気がない金額だ』銭形は吐き捨てるように言った。『奴らの目的は、営利誘拐ではないって事だ』

『じゃあ何で？』

サラが銭形を詰問する。

『俺に怒るなよ』銭形は両手を胸元で上げた。『デリッカリは、恐らくルパン三世に復讐がしたいんだ。ルパンの名を騙って卑劣な犯罪を犯し、侮辱して恥をかかせようとしているんだろうよ』

『なっ…』サラは怒りが大きすぎて、言葉を詰まらせた。『何よ、そんなつまらない理由で、クラリスやブレナン、ハルカを誘拐したって言うの!?!』

『まあ、奴も一応イタリアン・マフィアだ。面子や体面にはうるせえんだろうよ。しかも、この動画にはルパン本人を誘い出す意味もあるんだろう。あいつはコケにされるのが嫌いだからな』

『現れた所で、命を取ろうって魂胆ね』

薫は言いながら、ノートパソコンを自分の前に引き寄せた。

『おい、カオル、ハラ部長に釘を刺されたろう？勝手な行動はするな、と』

ダニエルはそう言うと、タバコを手に部屋の出口へ向かった。

『俺はタバコを吸いに行く。くれぐれも、勝手にパソコンを使うんじゃないぞ』

ダニエルはわざとらしくそう言い残して、部屋を出て行った。

「ダン、ありがとう」

薫は眩きながら、FBIのメイン・サーバーにアクセスした。何層ものセキュリティを通り抜けると、日本語の表紙が立ち上がった。

「何だ、こりゃ？」

銭形は画面に顔を寄せた。

『「電子通信映像傍受監視システムβ版」か。何だこれは？」』

桐生が声に出して読み上げて、首をかしげた。

「これは、今、私が開発中のテロ抑止プログラムや。」花屋の映像解析システムを参考にして組み立てたプログラムと連動して、メタデータ・音声・映像の複合的監視システムをこしらえたんや。日本での運用を目指して、現在は全米でテスト運用中なんよ」

「これって、NSAの盗聴システムみたいなモンか？」

「そうよ銭形警部。ただ、こちらの方が多角的に情報処理が出来るから、監視能力は高い

で」

薫は説明しながら、素早くデータを入力して行く。それに伴い、次々と画面が変わって行く。

「凄いな。これが本気で嫁働したら、プライバシーなどないも同然だな」

銭形は溜め息混じりに呟いた。

「何いうてんの。このデジタル化の昨今、個人情報保護なんて、風前の灯やで。むしろシステムから弾かれる方が、アイデンティティー喪失の危機や思うけど——。よし、捕まえた」

薫は言い終えて、エンターキーを叩いた。

モニター上には南カリフォルニアの地図が表示されており、その一点に緑色の印が点滅している。ベニス・ビーチ辺りである。

『これは何?』

サラが画面を覗き込んで尋ねた。

『デリッカリは、用心してプリペイドスマホを使っているようだから、奴の手下を片っ端から検索してみたの。そしたら、”倉庫番”とあだ名されるマルクって男のスマホが引っ掛かったわ。あいつ、表の顔は雑貨商だから、スマホも車も自分名儀なのよ。この数時間、誰かと頻繁にやり取りしてるわ』

『それがデリ＝カリ?』

『判らないわ。でもね』

薫は画面を切り替えた。どこかの通りの防犯カメラの映像である。男が大量の食糧品をピックアップトラックに積んでいる姿が写っている。

『こいつがマルクよ。この買い出しは、恐らく籠城用に違いないわ。ただ、この映像は数時間前のものだから、他の映像と合わせてこいつの動きをたどるのには、もう少し時間が掛かりそうね』

『その近辺なら、俺の手下が聞き込みに当たっているので、すぐ発見出来ると思いますよ』

後ろからそう声を掛けられ、全員が驚いて振り返った。ドアの所に、やや顔色の悪いクドーが立っていた。

『まあ、クドー!』

サラが泣き声で立ち上がった。

『クドーさん、大丈夫なの?』

花に尋ねられて、クドーは笑顔を見せた。

『サラの事が心配で、とても病院のベッドで寝てるなんて出来ないですよ』

サラは泣き笑いの表情でクドーをハグした。クドーは控え目に『痛いですよ』と抗議

の声を上げた。

「あいつの声、初めて聞いたぜ」

桐生はそこに驚いていた。

『とりあえず移動を始めましょう。基地（ベース）にする部屋は確保してあります』

クドーはそう言って皆を促した。

『待ってクドー』薫がパソコンのデータを消去しながら言った。『移動って言っても、私達の車はどうなってるの？』

『先程、ハラ部長の指示でタイヤ交換は済んでいましたよ』

クドーはそう言って笑った。

『あら、意外と気が利くじゃない、あの部長』

薫は肩をすくめた。

『よし、行くぞ。姫達を救い出すんだ』

銭形が厳しい表情で立ち上がった。

つつく

20180509

註：

※カリフォルニア・コネクション 日本テレビ系『熱中時代・刑事編』（1979）

主題歌

歌

：

水谷豊

第四章 サンタモニカの風

その1

VACANCES IN LOS ANGELS

第四章 サンタモニカの風

「1」

桐生達はジバリーヒルズ署を出ると、サンタモニカ・ブルーバードを西へ向かった。クドーが運転するバイパーを先頭に、タホとプジョーが続く。

バイパーはサンタモニカ・ブルーバードからユークリッド・コートに右折し、今度はアリゾナ・アベニューを左折。しばらく走ってまたリンカーン・ブルーバードで右折する。

「ずいぶん曲がるのね」

右に左に体を揺らしながら、花が言った。

「尾行がないかどうか確かめてるんや、多分」

薫がハンドルを切りながら答えた。

クリステイン・エマーソン・リードパークを左に見ながらリンカーン・ブルーバードを走ると、カリフォルニア・アベニューで左折、そしてまた7thストリートで右折した。

しばらく広い通りを走っていたが、左折してパラセイズ・プレイス・ノースという細い路地に入った。

「何か裏道みたいね」

花が周りを見廻しながら言った。家ごとにペールが置いてある。

「そうね、言ってみれば、ゴミ回収用の道やから」

薫は言いつつ、バックミラーを確認した。後ろからポンコツジョーが追い掛けて来るのが写っていた。

人目を避けるようにパラセイズ・プレイス・ノースを進み、とうとう行き止まりかと思えた所で、バイパーからサラが手を伸ばした。右方向を指差す。そこには、高級そうなコンドミニウムがあった。

パラセイズ・プレイス・ノースはそこで終わり、1stコートで丁字路となる。そこを右折すると、すぐ左にパーキングの入口があった。そこから地下駐車場に入つて車を停めると、エレベーターで暗証番号を入力して六階まで昇る。エレベーターを降りるとそこはペントハウス式のコンドミニウムであった。

「エル・トヴァール」。このコンドミニウムをベースキャンプとします。何故私がこの場所をセレクトしたか、と言いますと、実は……」

クドーが説明するのも聞かず、薫は備え付けてあったパソコンを起動した。WiFiに繋がると、『電子通信映像傍受監視システムβ版』を立ち上げ、倉庫番、マルクの検索を再開した。

やがて、システムがマルクの居場所を特定した。画面が三分割され、データ、地図、カメラ映像が表示される。

『マルクは、現在オーシャン・アベニューにいらっしゃるいわ。荷物を降ろしているから、どうやらアジトへ行くみたいね……って、あれ?』

画面を見ていた薫が、変な声を上げた。防犯カメラの映像はリアルタイムで、南北に走るオーシャン・アベニューと東から来るアルタ・アベニューとの丁字路を、海側から南に向いて撮っている。カメラのほぼ真向かいにあるコンドミニウム「オーシャン・アール」の前に停めたフォードのハッチバックから、荷物を降ろしているマルクがはつきりと映っている。そしてその先の、交差点の向こうに見えるコンドミニウムの銘板も読み取れた。

「エル・トヴァール」って、ここなんちゃうの?」

思わず日本語で言ってから、薫はペントハウスの窓に駆け寄った。桐生達もそれを

追って窓に取り付いた。

六階の窓から西は、パームツリー以外遮る物もなく、沈んだ夕陽の残照に紅く染まるサンタモニカ・ビーチからの太平洋の広がりが一望出来るのだが、その真下が、丁度オーシャン・アベニューとアルタ・アベニューとの交差点で、今まさに大きな荷物を抱えているマルクの姿が肉眼で確認出来た。

『何、デリ||カリのアジトって、”オーシャン・アイアール”なの?』

薫が目を丸くしながらクドーに訊いた。

『どうやらそのようです。この一〜二週間、頻繁に出入りしていたらしく、”その筋”の連中の間では話題になっていたようです。デリ||カリが何か企んでいると。実は、このコンドミニウムをセレクトした理由は、この為です』

『よくそんな話が聞き出せたわね』

サラが感心して言った。

『まあ、同業者達はやっかみで足を引っ張るつもりなんでしょう、色々教えてくれましたよ。かなりの火器を入手しているらしい、とか』

クドーは笑いながら言った。

『中の様子が知りたいな』

窓から身を隠す位置に移動しながら、銭形が呟いた。

『今、セキュリティ会社の防犯システムにハッキングしてるから、もう少し待ってて』
薫がキーボードを叩きながら言った。

『ところでクドー』

サラが真顔でクドーに声を掛けた。

『何ですかサラ』

『この、”オーシャン・アイアール”っていうコンドミニウムなんだけど、オーナーは誰？』

『ゼネラルマネージャーは、マリツサIIホワイトです』

『早速彼女に連絡を取って。その…』

『そのコンドミニウムは、今日から一週間、私の義兄が運営するPMC（民間軍事会社）がインドア・アタックの訓練の為に借り受ける、という契約が、もう成立しています』

サラが全てを言い切る前に、クドーが言葉を引き継いだ。

『さすがクドー。仕事が早いわ』

『と、いう事で、今晚中には、デリリーカリ一味以外の住人達は、一時的に同じ系列の他のコンドミニウムに移動するはずですよ』

クドーは銭形を見て言った。

『そうか、判った。では、決行は明日の早朝という事だな』

銭形は大きく頷いた。

『映像が繋がったわ』

薫が声を上げたので、全員がパソコンのモニター前に集まった。

『この防犯会社、ネットセキュリティがなってないわ。後で忠告してあげなきゃ』

薫はそう言いながら、カメラ映像をクリックして拡大する。

『一・二階は商業施設が入っているわ。シーフードレストランとかね。三階以降がアパートメントエリアなんだけど、ここ、二階層毎のコンパートメントなのよ』

『どう言う事？』

サラが首をかしげた。

『要は二階建てのコンドミニアムって事。三・四階が一組、五・六階が一組、七・八階が一組、そんな感じ』

『なるほど。結構リッチじゃない』

『で、十二階までは民間人の住んでいる区画なんだけど』薫は映像を切り換えた。『問題はペントハウスの、エレベーターから一番離れた部屋』

ドアの前に、ウーザーを持った男が二人立っている。その隣の部屋から男が二人出て来ると、今まで立っていた男達と交替した。立っていた男達は、隣の部屋に戻って行った。新しい男達の手には、MP5がある。

『ここにいるのは間違いなさそうだな』

銭形が腕組みをして言った。

『そうね。すぐ助けに行かなきゃ』

サラが言った。今にも飛び出しそうな勢いである。

『だめよ。相手は銃で武装してるのよ。それに、隣の部屋に何人いるか判らないのに。何の用意もなしに突入するのはバカげてるわ』

『バカとは何よ！カオル、クラリスやテンペ、ハルカが心配じゃないの？』

『何で私に嘯み付くのよ。心配なのは同じよ。でも、相手は情け無用のデリカリアの。闇雲に突っ込んででも被害が大きくなるだけよ。まだ民間人だっているんだから』

薫は諭すように言った。

『ここは、カオルの言う通りだ、サラ』銭形も口を揃える。『失敗しては元も子もない。デリカリアとやり合うには、装備が足りない。それに民間人がいれば、それを盾に取られるかも知れん。クラリス達には、この一晩ガマンして貰おう。全ては明日だ』

その時、クドーのスマホが鳴った。

『今、俺の手下が下に来ています。武器を持って来てくれました』

すぐにエレベーターが開いて、あごヒゲをたくわえた男と、黒い長髪の男、どちらも日系人らしい二人が、大きなスチールの箱を台車で押して降りて来た。

『よう。注文の品、持って来たぜ』

ヒゲの男が低い声で言った。帽子を目深に被っているので、表情までは判らないが、声が笑っている。

『何で笑うんだ?』

クドーも笑いながら尋ねた。

『珍しい注文だからな。武器屋のおやじも“カンフー映画でも撮るのか?”って笑ってたぜ』

ヒゲの男はそう言いつつ、箱を開けた。

箱の中には、銃やスタン・グレネード、テザー銃、それに日本刀やヌンチャクなどがぎっしりと詰まっていた。

「お、これは」

桐生が、箱の中から細長いバッグを取り出した。

「そいつは“バレットM82”対戦車ライフルだ」

ヒゲ男は日本語で言った。

「知ってる。つい最近、こいつにはお世話になった」

桐生は唇を歪ませた。

「良い銃だよな。シモノフPTRS1941より扱い易いしな」

ヒゲ男は笑って言った。

『サラにはこれを』

クドーはテーザー銃とノンチャクをサラに手渡した。

『なぜ私はGUNじゃないの?』

『あなたには人を殺して欲しくない』

サラの問いに、クドーは強い口調で答えた。

『私は、ここで留守番で良いよね?』

花が、引きつった表情で言った。

クラリスとブレナン、遙の三人は、広いリビングルームの壁際に並べた椅子に腰掛けていた。さすがに縛られてはいないが、男達が銃を持つて立っているの、迂闊には動けない。

部屋の中央のソファアーに、デリカリが座って、チビチビとブランデーを舐めている。『俺は別にあんたらには恨みはねえんだがな』

デリカリは、グラスを置いた手で、横に置いてあるグロックを撫で回した。

『それなら、今からでもブレナン博士と遙を解放して下さい』

クラリスは毅然とした態度で言った。

『それは諦めてくれ』デリカリは下品に笑った。『あんたらはエサなんだ。エサは何も

『考えなくて良い。どうせ死ぬんだからな』

『あなたはルパン三世に用があるのでしよう？それなら、この二人は無関係です』

『俺は、奴に恥をかかせればそれで良いんだ。無関係ならそれもよし、さ』

『デリⅡカリは一向に取り合わない。』

『でも恐らく、おじさまは来ませんよ』

クラリスは微笑みながら言った。

『何故そう思うんだ？』

『デリⅡカリは不信げな表情でクラリスを見た。』

『おじさまは、こんな割りの合わないリスクには手を出さないでしょう』

『それより、こんな派手な事をして、FBIの介入を心配した方が良いんじゃないの？』

ブレナンが肩をすくめて言った。

『別にFBIなど恐かねえ。それに、クラリス、あんたにや残念だろうが、ルパンの奴は来るぜ。奴はバカだからな。あんたを助けようと、俺に殺されにやっけて来るさ』

『デリⅡカリは不敵に笑うと、ソファアに大きく寄り掛かった。』

『ご免なさい、テンペ』

クラリスは小さく頭を下げた。

『大丈夫よ、気にしないで。きっと何とかなるわ』

ブレナンは明るい表情で答えた。

「Haruka. I am very sorry.」

クラリスは、今度は遙に向かって頭を下げた。

花がないので、遙には周りの会話は全く解らない。ただ、クラリスが自分の事を気使ってくれているのは、はつきりと感じられた。なので、遙は勢一杯の気持ちを込めて、答えた。

「んーん、No problem.」

それに続けて遙の口から出た言葉は、日本語の解らないその場の全員が理解出来なかった。

「大丈夫よ。おじさんが必ず助けに来てくれるから」

つづく

20180529

註：

バレットM82

米軍対戦車ライフル(対物ライフル)。ゲーム内(O

TE)では、KM. 50対物ライフルという名称で、桐生のメイン・ウェポンだった。

シモノフPTRS1941 ソビエトセミオート対戦車ライフル。口径14.5ミリ 全長2140ミリ 『カリ城』で次元大介が使用

その2

VACANCES IN LOS ANGELS

第四章 サンタモニカの風

〔2〕

朝五時。まだうす暗い中で、桐生、薫、サラ、クドー、銭形は熟睡状態から一気に目覚めた。全員、どんな状況でも十分な休養を取る、そういう訓練を積んでいる。夜明けまでまんじりとも出来なかつたのは、花だけである。

全員がリビングに揃うと、そこには昨日荷物を届けに来た日系人二人もいた。

「何や、まだおつたん？どないしたん？」

薫が日本語で尋ねた。

「つれない姐ちゃんだな」ヒゲ男が笑つて言った。「アフターサービスだよ。ちよつと手助けが必要だろ？」

言いながら、何やらゴトゴトとテーブルの上に置き出した。長髪の男が、それを避けながらコーヒーの入ったマグカップを人数分置く。

「何だ、これは？無線機か？」

銭形が機械を取り上げながら尋ねた。

「そう。こちらはデリッカリより人数が少ない。それを生かすのは、関係です。花さん、あなたには司令塔になって貰います。皆は、無線で連絡を取り合つて、有機的に動いて、姫達を奪還するのです」

クドーは言いつつ、無線機を全員に手渡した。

「ど、どうやって？私が司令塔つて、どういう事？」

花は目を丸くして言う。

「あなたは最前線には出ない。その代わりに、『電子通信映像傍受監視システムβ版』を見て、奴らの動きを的確に知らせて欲しいのです」

「そんな事、私に出来るかな？」

「大丈夫。こいつが手伝いますから」

クドーに示されて、ヒゲ男がニヤリと笑った。

「なるほど。面白いな」

銭形が無線機を取り上げて言った。

「分かれてお姫様を助けに行くつて訳だな」

桐生の言葉に、クドーは頷いた。

「この無線機はこの部屋の母機を中心とした独自の電波帯を利用しているので、奴らに傍受される気使いはありません」

クドーは言いつつ、ヒゲ男と共に無線機を各人に装着させた。

「へえー、こんな軽いのに、こんなクリアーに聞こえるんやね」

無線機のスイッチを入れた薫が、目を丸くした。

「よし、行くぞ。姫達を救出し、デリッカリを逮捕する！」

銭形が目を怒らせて言った。

「遙、待ってろよ」

桐生は拳を握り締めた。

ほぼ同時刻。クラリス、ブレナン、遙の三人は示し合わせたように目を覚ました。三人ともかなりの修羅場を経験しているので、妙に肚が据わっている。人質という状況にも拘わらず、しっかりと熟睡していた。

『この状況で熟睡たあ、大した玉だけお前ら』

リビングには既にデリッカリがおり、ソファーでタバコをふかしていた。

『何か問題でもあったの？』

ブレナンが当て付けのように尋ねた。

『ああ。大有りだ』

デリールカ리는吐き捨てるように答えた。

『昨晚、建物中で何か物音がしていましたが、それが関係しているのでしょうか?』
クラリスが静かに言う。

『畜生、判つていやがったのか。ムカツく女だ』

デリールカ리는更に苦い顔をした。

『どういう事?』

首をひねるブレナンに、クラリスは微笑みながら言った。

『恐らく、何らかの理由をつけて、ここの住民を全員どこかへ避難させてしまったのよ、あの人達。いずれ、私達を救いにここに来てくれるわ』

銭形を先頭に、桐生、薫、サラ、クドローは、"オーシャン・アイアール"のエントランスにやって来た。朝の六時過ぎは、車もほとんど通らない。

五人がエントランス前に来た丁度のタイミングで扉が開き、一組の男女が出て来た。勘違いイケメンの男に対し、女は目を見張るほどのグラマラス美女である。

『あら、クドローちゃん、おはよう。もう私達で最後よ。住人は一人も残ってないわ』
美女が妖艶に微笑みながら言った。その女に、銭形が詰め寄った。

『おい、不二子、お前こんな所で何してやがる?』

『不二子? 峰不二子か?』

桐生は思わず二度見した。少々世事に疎い彼でさえ、その名前は知っている。そんな桐生に、不二子はウインクを投げると、すぐに銭形に向き直った。

「あん、銭形警部。お久し振りなのに、不粋なセリフね。このマークと一晩中愛し合つてたに決まつてるじゃない」

マークは、日本語は判らないので適当に頷いて見せた。

「不二子の居る所、必ずルパン有り、だ。おい不二子、ルパンはどこだ?」

更に詰め寄る銭形を、不二子は軽くいなした。

「やめてよ。私、ルパンのお母さんじゃないの。彼がどこで何をしてるかなんて、判る訳ないじゃない。私はたまたま、友人であるクドーちゃんに頼まれて、しばらく愛の巣から離れなくてはならなくなった、悲しい雛鳥つてだけよ」

「雛鳥つて柄か? まあ何でもいい。今からデリ||カリと荒事だ。今すぐここを離れろ」

「まあ、優しいのね銭形警部」

「邪魔なだけだ」

「何よ、失礼しちゃう」不二子は小さく肩をすくめた。「まあ、ケガしないように、皆頑張つてネ。デリ||カリとルパンの因縁に巻き込まれないようにね」

「もう首までどつぷり浸つてるよ」

そう返した銭形に、不二子は背中越しに手をひらひらさせて、マークと共に立ち去つ

て行った。

「何や、あのエロ女。一馬にまで色目使こて」

薫がむくれて不二子の背中を睨みつけた。

「相手にしないこつた」銭形は笑って言った。「大先輩のやる事だ。大目に見てやれよ」

「いくつなのよ？あの人」

「言わぬが花だ」

銭形は肩をすくめた。

”オーシャン・アイアール”の階段は、西側のエントランスの近く、建物の中央近くの二本である。サラとクドーが手前、そして桐生と薫は中央の階段を通る事となった。

「銭形警部は？」

そう尋ねた薫に、銭形は満面の笑みで答えた。

「お前さん達とは別ルートを取るよ。まあ任せろ」

薫は肩をすくめたが、何も言わなかった。

「俺達は陽動だ。派出に行こうぜ」

桐生はそう言って、ライフルを構えた。薫もFN P90を構える。

サラとクドー、銭形が視界から消えたのを見届けると、桐生は目の前の廊下にバレットM82をぶつ放した。轟音が反響し、店舗のガラスが振動する。

「桐生さん、薫さん、聞こえる?」

花の声はイヤホン越しにも少し緊張しているのが判る。

「ええ、バツチリや」

「あと少しで、中央階段から二人降りてくるわ。一人目は拳銃、もう一人は機関銃みたい」

「了解」

桐生が答えた直後に、男が二人階段から降りて来た。桐生は二人の体勢が整う前に、M82を撃った。弾丸は二人目のウージーを粉々にして、爆発させた。二人はその破片を浴びて、血まみれになって倒れた。桐生は落ちているベレッタを拾い、ベルトに差した。

「今、エレベーターで三人降りて行ったわ。五階を過ぎた」

「ありがとう」

桐生は答えつつ、M82を廊下の奥、正面にあるエレベーターに向け、連射した。扉の上部に弾着を集中させ、坑内に扉をめり込ませる。

降りて来たエレベーターの箱は、その扉にぶつかり、坑内の壁に倒れ掛かって止まった。そこへ薫が走り寄り、隙間からスタン・グレネードを放り込んだ。轟音が鳴り響き、箱の中はすぐ静かになった。

「更に二人、階段から。二階から降りた所」

花の言葉を聞いて、桐生は手すりの壁越しにライフルを撃ち込んだ。すぐに、悲鳴と共に足を撃ち抜かれた二人が転げ落ちて来た。

「凄いわ。ゴッド・モードやわ」

「何だつて？」

薫の言葉は、桐生には理解出来なかった。

「気にしんといて。さあ、上、行きましよ」

薫はさつさと階段を上がって行った。桐生も深くは考えず、薫の後を追った。

「連中は上へ行ったわ。しばらくは誰もいない」

花が溜め息まじりに言った。

「ゲリラ戦の鉄則やね。私達が下から来たから、体勢を立て直す為に、上階へ戻ったんやわ」

薫がそう言った時、ヒゲ男の声がイヤホンから聞こえた。

「クドー、上から四人」

その次の瞬間、廊下の向こう側の階段ホールが、爆発的に光った。フラッシュ・グレネードだ。

「あつちもやってはるね」薫はちよつと足を止めた。「銭形警部は大丈夫やろか？」

「まあ、あつちは心配ないだろ」桐生は肩をすくめた。「こつちはこつちの仕事をするだけだ」

「そっやね」

二人はまた階段を登り始めた。

下からの銃声や爆発音はデリッカリの耳にも届いていた。

『くそう、ルパンか?』

『どうやら昨日のヤクザ達のようにです』

報告に来た白人が言った。昨日のレストラン襲撃に参加していた男だ。

『そんな奴らに手間取ってんのか、あいつら』デリッカリは荒っぽく立ち上がった。『ケリガン、お前が行って、一丁もんで来い』

ケリガンは返事もなく出て行った。それを見送って、デリッカリは大きく舌打ちをした。

『どうしたの? 予定と違ってた?』

ブレナンが嫌味な口調で言う。

『何なんだあいつらは? いちいち俺の邪魔をしゃがって』

『あんたがクラリスなんか拐(さら)うからいけないのよ』ブレナンは半笑いである。

『私、ルパンの事は良く判らないわ。でも、ゼニガタやカズマがあんたにとって厄介な相

手だつて事は判る。あんたは、クラリスに手を出すべきじゃなかったのよ』

サラとクドーは、様子を見ながら階段を登つてペントハウスを屈指した。桐生達と別れてすぐ、下から銃声が聞こえて来た。サラとクドーは互いに目で確認すると、サラはヌンチャク、クドーはカリ・スティックと持ち直した。

足音を控える為、走らずに階段を登っていたサラとクドーの耳に、ヒゲ男の声が響いた。

「クドー、上から四人」

クドーは素早くアイス・ホツケーのパック大の塊を取り出すと、ピンを抜いて階段の上へ放り飛ばした。二秒後、閃光が爆発し、三秒ほど周りが真っ白になった。光が収まった所へ登つて行くと、MP5で武装した四人が、目を押さえてふらついていたので、サラとクドーは四人に飛び掛かり、殴つて気絶させると、手早く結束バンドで縛り上げた。『ちよつとヒゲの人、英語で言つてよ』

サラが抗議すると、ヒゲ男は笑つて言った。

『悪かつたなお嬢ちゃん。何せこの度は、英語がマイノリティなんぞな』

『で、状況は?』と、クドー。

『奴らはセオリー通り、上階へ退いてつたぜ。屋上のペントハウスへの階段にソファアヤデスクでバリケードを作つてる。三人居て、バイザーをつけてる』

『なるほど。じゃあ、閃光弾はダメって訳か。別の手を考えなきゃな』

クドーが唇の端を釣り上げて、言った。これまでにサラが聞いた事のない口調だった。

『ねえ、クドー』そんなクドーに、サラが尋ねた。『何だか、随分と親しそうなんだけど、あのヒゲの人とはどういう知り合いなの？』

『なあに、奴は古くからの腐れ縁ですよ』

クドーは小さく肩をすくめて見せた。

つづく

20180611

註 :

ゴツド・モード 『PERSON of INTEREST 犯罪予知ユニット』
CBC 2011年 より。

その3

VACANCIES IN LOS ANGELS

第四章 サンタモニカの風

〔3〕

銭形は一人“オーシャン・アイアール”の外側を回り、建物の東側へやって来た。こちらは、外壁の防水作業の為、最上階まで足場が組んである。上部へ人や物を運ぶ為のゴンドラが、鎖で固定してあった。銭形は鎖の南京錠をピッキングで素早く開けてゴンドラを解放すると、「上昇」のスイッチを入れた。ゴンドラは一度ガクン、と揺れて、ゆっくりと昇り出した。

「よしよし、これで一気にペントハウスまで行けるぞ」

一人領いた銭形だったが、本来窓拭き作業用のものなので、動きが遅い。

「こりゃあ、思ったより時間が掛かりそうだな」

そう呟きながら屋上を見上げた銭形の目に、M4カービンを持った男が二人、上から覗き込む姿が映った。

「いけねえ、バレちゃった」

銭形は言いつつガバメントを引き抜いた。

「何やってんだよ、とつつあん」ヒゲ男がイヤホン越しに呆れ声で言った。「そんなの、すぐバレると思わなかったのか？」

「うるさい。何とか援護してくれ」

銭形の周りを銃弾がかすめた。バルコニーの張り出しがある為、真下にいる銭形は狙いにくい。だが、カービンの高速弾は、ゴンドラのそこら中を穴だらけにしていく。

「やれやれ、世話の焼けるとつつあんだな」

ヒゲ男は笑いながら着ていたツナギを脱いだ。下は紺色のスーツ姿であった。今まで被っていたキャップを取って、どこからか取り出した中折れ帽を目深に被り直した。スチールの箱から黒くて長い塊を取り出して、猛スピードで組み上げて行く。

「あーっ！」その姿を見た花が、大きな声を上げた。「ち、ちよ、あなたは…あなたは…」
「何だいお嬢ちゃん、あんまり見ないでくれよ。俺はパンダじゃないんだぜ」

ヒゲ男はそう言いつつ、あつと言う間に組み上がった長大なライフルを持つてベランダに出ると、手すりに銃身を置いて構えた。

「シモノフPTRS1941。やっぱりコイツだな」

ヒゲ男は引き金を絞った。轟音と共に、隣の“オーシャン・アイアール”の屋上で銭

形を攻撃していた男のM4カービンが粉々に吹っ飛んだ。男はもんどり打って倒れる。もう一人が「エル・トヴァール」に向けてカービンを乱射したが、素人同然の腕なので、近くへの弾着さえない。ヒゲ男は涼しい顔で再び引き金を絞った。カービンの男は左肩を中心に体を回転させながら吹っ飛んだ。

「じ、次元大介……さん……？」

花は、自分の言葉を疑うような口調で尋ねた。

「まあね」次元はニヤリと笑った。「お見知り置きを、お嬢ちゃん」

桐生と薫は、十二階の階段を登る所まで来ていた。屋上のペントハウスへの登り口がデスクやソファで塞がれている事は、先程の花からの報告で判っていたので、一旦十二階で留まって、装備を確認した。桐生はM82と拾ったベレッタ、白鞘の二尺の刀。薫はFN P90と自前のシグ・ザウエルP220。そして残り二つのスタン・グレネードである。

「んー、どうやろね？」

薫が笑いながら言った。

「何とかなるさ」

桐生も笑った。

階段の上からは、気配はしても攻撃を仕掛けて来る様子はない。二人は目でタイミング

を合わせると、薫がスタン・グレネードを二つともピンを抜いてバリケードの隙間に投げ込んだ。

轟音と共に桐生が入れ替わり、バリケードにM82を全弾撃ち込んだ。木の破片が飛び散ったが、強大な威力を誇る対戦車ライフルと言えど、積み上げた机や椅子を全て破壊するには至らない。

「ちっ」

舌打ちして、体当たりをしようと思構えた桐生の脇を、男が一人すり抜けた。着物に袴姿のその男は、黒い長髪をなびかせながら、手にした白鞘の仕込みを抜いた。一瞬で数回の風切り音がして、次の瞬間にはバリケードが小間切れにされて崩れ落ちた。バリケードのすぐ後ろにいた二人が目を丸くしている間に、男は仕込みの鞘で鳩尾を突いて倒した。

「さあ。道は拓いたでござるよ」

「お前、ヒゲ男と一緒にいた…」

「石川…五エ門ね？」

桐生が言いかけたのを、薫が横から言葉を奪った。

「いかにも。クラリス殿奪還の為、助太刀に参った」

五エ門は、振り返らずに答えた。

桐生がM82を捨てて五エ門の前へ出ると、ペントハウスの廊下には、五人のMP5を持った男達と、デザート・イーグルを構えたケリガンが立っていた。桐生は咄嗟に刀を抜いた。

ケリガンの撃った、44マグナム弾を、桐生の刀が真つ二つに斬った。両側の壁に彈着の穴が空く。ケリガンの射撃の腕が良かった事が幸いした。

「お主、なかなか筋が良い」五エ門は簿く笑った。「後ろを付いて参れ」

五エ門はそう言うのと、躍起になって乱射して来る弾丸を斬り落としながら前進を始めた。

「すげえな、マンガみたいだ」

思わず桐生が呟いた。

「お気楽な事、言わんといて」

薫はそう言うのと、五エ門の背後からFN P90を壁や天井に向けて掃射した。5.7×28mm弾が豪華な化粧板を砕き、大量の破片が男達に降りそそいだ。破片に氣を取られて、火線が鈍る。

その隙を逃がさず、五エ門は素早く踏み込むと、左の三人のMP5を真つ二つに斬った。薫のFN P90は、右の二人の足を撃ち抜いた。桐生は真つ直ぐにケリガンに突っ込むと、一瞬軸をずらして発砲をかわし、刀をデザート・イーグルに叩きつけた。刃

は銃身の真ん中を割って、遊低の中程まで食い込んだ。

ケリガンは鬼のような形相で銃をひねった。二尺刀はかん高い音を立てて折れた。刀が刺さったままの銃を投げ捨て向き直ったケリガンの目に、右拳を堅く握って振りかぶった桐生の姿が映った。

雄叫びと共に、桐生は鉄拳をケリガンの顔面に叩きつけた。ケリガンは全く反応出来ず、まともに突きを食らって、床に叩きつけられた。かなり高い鼻が平らにひしゃげていた。

「銃がなけりやこつちのモンだ」

気絶したケリガンを見下して、桐生は呟いた。

その直後、廊下の奥で爆発が起こった。五エ門は素早く身を隠したが、桐生と薫は吹き倒された。その爆風で、ウージーを持った三人が吹き飛ばされて来た。

『おつかしーなあ、火薬の量、まーちがっちゃったかなー?』

埃と破片にまみれて、クドーが首をひねった。その体の下から、やはり埃まみれのサラが這い出して来た。

『ちよつとやめてよクドー。死ぬかと思ったじゃない』

そう言いつつクドーを見たサラは、小さく首をかしげた。

『クドー、あなた、ちよつといつもと…』

口を開きかけたサラのすぐ後ろで、人影が動いた。血まみれになりながらも、ウージーを構えようとする。

その気配に気付いたサラが振り向いたのと同時に、彼女のすぐ横で乾いた銃声がして、ウージーの男の額に穴が空いた。

耳鳴りのしているサラがもう一度振り返ると、まだ銃口から煙の上がつているワルサーP38を構えた男がいた。それは、先程まで一緒だったクドーではなかった。

『あなた…誰?』

サラは呆然とした表情で尋ねた。

『俺かい? 悪いいな、ちやくんと自己紹介してなかつたな。俺はルパン三世だ』

次の瞬間、至近距離からのサラのヌンチャクを、ルパンは首をすくめてかわした。

『クドーはどこだよ!?!』

『びっくりした。おどかすな』ルパンは軽い口調で言った。『安心しなよ。あいつはただ意識は戻ってないが、命に別状はない。病院のベッドでゆっくり休んでるよ』

それを聞いて、とりあえず落ち着いたサラだったが、すぐに別の事に思い至って、顔が赤く染まった。

『という事は…?』

ビバリーヒルズ署に来た時には、既に入れ替わっていた事になる。クドーだと信じて

疑っていなかったの、サラはかなり無防備な態度を見せていた自覚がある。

『あんたのハグは優しかったなあ。ちよつとクドーに嫉妬しちゃったぜ』

ルパンはそう言つてウインクして見せた。

突然の爆発に、部屋全体が揺れた。クラリス、ブレナン、遙は耳を押さえて身を低くした。むしろ銃を持ったギヤング達の方が右往左往している。

『畜生、ケリガンの奴、何をやってやがる！』

デリⅡカリは毒づいて、手下を集めた。この部屋には六名残つており、手元にはM4カービン二挺とMP5四挺。デリⅡカリのグロックと合わせても、火力はかなり心許ない。

『おい、そいつらに手錠を掛けとけ』

デリⅡカリがアゴをしゃくつた。二人に銃を突きつけられ、クラリスと遙はゆつくりと立ち上がった。ブレナンは動かない。

『おい、立て！』

メキシコ系の男にMP5を向けられたブレナンは、悲しそうな（そんな感じに見える）表情で言つた。

『恐くて立てないの。手を貸して』

今まで聞いた事もないような、か細い声である。

『ふざけるな、早く立て！』

メキシコ系が苛立ちも顕わに喚いた。しかし、ブレナンは首を弱々しく振った。

『無理…』

『クソツ』デリーカリは舌打ちをした。『おい、お前、そいつを立たせろ』

デリーカリは、遙に向けてアゴをしやくった。遙は、何となく言わんとしている内容は判ったのだが、あえて判らない体で、きよとんとした表情でデリーカリを見た。

『このコは英語が判らないの』クラリスが真面目な顔で言った。『あなたが何を言っているか、彼女には理解出来ないわ』

『ああ、面倒くせえ。ならお前が博士を立たせろ』

デリーカリは今度は銃で、クラリスに指示をした。クラリスは何気なく遙を促して、二人でブレナンを助け起こした。そのまま扉から離れた所へ移動する。メキシコ系が腰だめにMP5を構える。

『変な気を起こすんじゃないぞ』

デリーカリがそう言った時、扉がノックされた。いつしか、外の騒音は止んでいる。

またノック。デリーカリはその両開きの大きな扉を睨んだまま応えない。

ノックの音は段々大きくなり、終には足で蹴るような音になった。それでもデリーカリが黙っていると、やがて扉を叩く音が止んだ。

少し間があつて、扉の一回り外側の壁にドーム型の切れ目が生じ、次の瞬間には型の内側が扉ごと賽の目状に崩れ落ちた。

壁にポツカリと空いた穴の向こうに、六人の男女が立っていた。崩れた瓦礫の前に立っていた、顔の前で刀を構えた五エ門が、納刀して後ろに下がった。

『き……貴様ら……』

デリⅡカリが食い縛った齒の間から声を絞り出した。

「遙、迎えに来たぜ」

桐生が、不敵な笑みを浮かべて言った。

「おじさんー」

遙は元気な声で返した。

『良かった。テンペも無事みたいね』

サラは少し安心した表情を見せた。

『皆無事だったのね。良かったわ』

薫の顔にも笑みが浮かんだ。

『デリⅡカリ、逮捕だ』

銭形が手錠を取り出して、デリⅡカリを睨みつけた。

『よう、アゴ野郎』ルパンが挑むように一歩前へ出た。『お前に呼ばれて来た訳じゃねえ

ぜ。俺は、クラリスとの約束を守りに来たただけだ』

『おじさま…』

クラリスは両手を胸の前で強く握りしめた。

『言っただろ、クラリス。何かあったら、おじさんは地球の裏側からだってすぐ飛んで来るってな』

ルパンはそう言っつて、クラリスに微笑みかけると、すぐに表情を変え、険しい眼でデリ||カリをねめつけた。

『さあて、デリ||カリ、何をして遊ぶのかな？』

つづく

20180623

その4

VACANCES IN LOS ANGELS

第四章 サンタモニカの風

「4」

『よう、デリ||カリ、俺に用があつたんじゃなかったのか?』

ルパンは、歯がみをするデリ||カリを嘲るように言った。

黒人のギャングが、ウージーをクラリスに向けた。他のギャング二人が、ブレナンと遙を狙う。メキシコ系と、残り二人のMP5がルパン達に向けられた。

『まあ、ここまでやって来た事は誉めてやるぜ。だが、残念ながらこれまでだ』

デリ||カリは何とか虚勢を張るぐらいまで持ち直した。グロックを持ち上げ、ルパンに向ける。

『動くなよ。人質の命を助けたければな』

ようやく有利な立場に立った事を確信して、デリ||カリは顎をしゃくった。

「人質を放せ」

桐生は日本語で言った。

『何を言ってるか判らんが、とりあえず黙れ』

デリⅡカリは取り合わない。

「お前が何を考えてるか、俺には判らん」桐生は構わず続けた。「だが、俺は銭形のように優しくはないぞ。逮捕などと生ぬるい事はしない。遥や姫達に何かあれば、容赦しないぜ」

『お前が不穏な事を言ってるって事だけは判るぜ』

デリⅡカリは歯を剥き出して笑うと、グロックを桐生に向けた。デリⅡカリの内に殺気が膨れ上がり、その場の緊張が一気に高まった。全員の注意がデリⅡカリと桐生の上に乗った。

クラリスと遥は、互いの目を見て意志を確認し合うと、同時に行動を起こした。自分に銃を向けている男の意識がデリⅡカリに向いている隙を突いて、銃を外へ払いながら躊躇なく股間を蹴り上げた。不意を突かれた二人は口から泡を吹いて悶絶した。

一瞬遅れて、ブレナンは自分の前の男が構えているMP5をつかんで一気に外側に捻った。バキツという音と共に、男の人差し指が折れた。男が絶叫を上げた所を、ブレナンのチョップが喉仏を強打して、男はゴロゴロと音を立てながら倒れた。

『貴様らっ！』

咄嗟にMP5をブレナンに向けたメキシコ系の肩に、サラのテーザー銃の電極が突き刺さり、彼は棒のように硬直して倒れた。残りの二人は、それぞれ銭形が投げた縄付き手錠と、桐生の投げたベレッタが眉間に命中して、白眼をむいて倒れていた。

『デリ＝カリ！』

ルパンは鋭く叫ぶと、引き金を絞った。

デリ＝カリは横つ飛びでルパンのワルサーを避けつつ、逃げようとしたクラリスを捕まえた。左腕を首に掛け、グロックをクラリスの頭に突き付けた。

『動くなルパン！』

デリ＝カリはしてやったりな表情で喚いた。ゴリツと音がするほどグロックを押しつける。

『ごめんなさい、おじさま』

クラリスが口惜しそうに言った。

『おいおいデリ＝カリ、お前にはプライドも恥もないのかよ』

ルパンが肩をすくめた。

『うるせえ、俺はお前に復讐が出来ればそれで良いんだよ』

『デリ＝カリ、もう諦めろ。お前に勝ち目はねえ』ルパンは諭すように言った。『そもそも俺とお前のいざこざは、ルパン帝国の話しだ。しかもその帝国も、今や存在しない。』

これは俺達だけの問題で、特にクラリスには何の関係もない。話しがあるなら、俺達だけでしょうじゃねえか』

『この女は、大いに関係があるぜ』

『何がだ?』

『お前が大事に想ってるって事さ。お前の大事な物を奪うのも、俺の復讐のひとつだ』

デリ㇏カリはそう言って、嫌味な笑い顔を見せた。

『今なら、命までは取らない。ロス市警に身柄を引き渡し、法の裁きを受けさせてやる。だが、もしクラリスを傷つけたら、この場で殺す』

ルパンは重たい声で言い放った。右手のワルサーを握り締める。

『おい、殺しはいかんで、ルパン』

銭形が牽制する。

『ほざけ。この女が死ぬ所を見て、せいぜい嘆き悲しめ』

デリ㇏カリはグロックでルパンを指してそう言うと、再びクラリスに銃を押しつけようとした。

クラリスはその機を逃がさず、デリ㇏カリの右手を内側から自分の右手で押さえて、同時に左肘でデリ㇏カリの左脇を強打した。その衝撃で力の緩んだデリ㇏カリの左肘を下から持ち上げて、潜るように頭を抜いた。膝を屈して身を低くする。

クラリスが動いた次の瞬間には、桐生は、デリィカリに向かってダッシュしていた。

デリィカリは、逃げようとするクラリスと突進して来る桐生と、両方の対処に一瞬迷い、反応が少し遅れた。

ワルサーが火を噴き、デリィカリの手からグロックが弾け飛んだ。クラリスはデリィカリの懐を飛び出し、入れ換わりで桐生が飛び込んだ。

「おおおっ！」

桐生は雄叫びを上げ、飛び込んだ勢いそのまま、結城晶直伝の『猛虎硬爬山』を叩き込んだ。デリィカリの体は吹っ飛び、巨大な一枚板のガラスを突き破った。そのままテラスの手すりにぶつかって跳ね返る。そこへ駆け込んだサラが、『ライシング・ニー』でデリィカリをのけ反らせると、『サマーソルト・キック』で更に手すりに叩き付けた。

手すりに寄り懸かって辛うじて立っているデリィカリの前に、ゆらりとルパンが立った。

『H a s t a l a v i s t a (地獄で会おうぜ), b a b y』

ルパンは呟くと、デリィカリの両肩に二発ずつ撃ち込んだ。着弾の衝撃で、デリィカリの体がのけ反った。ルパンは、更に一発発射した。ワルサーのスライドストップが掛かった。

デリィカリの体は、ゆっくりと後ろに倒れ込み、手すりの向こうに落下した。

「あつー！」

遙が思わず声を上げたが、その直後、縄が張つて音を立てた。少し重さに引かれながらも、銭形と薫がその縄を支えていた。デリッカリの体が落ちる直前に、銭形が縄付き手錠を投げ、足首に掛けたのだ。

引つ張り上げてみると、デリッカリは気絶しており、ゴマ塩の角刈りの髪の毛が、一度真ん中で一筋のハゲになっていた。

『ねえ、みんな無事？ 部屋の中にカメラがないから、判らないの』

イヤホンから、花が心配そうな声で尋ねて来た。

『ああ、ハナちゃん、俺達はだーいじょうぶだぜえ。ご心配なく』

ルパンが明るく答えた。

『あ、その声、ホントにルパン三世なのね！ わー、凄ーい！』

花がイヤホンの向こうではしゃいでいる。

「花ちゃん、もうどうでも良さそうだけど、一応私達は大丈夫だから。念の為」

薫が、マイクに向かって苦笑しながら言った。

「おじさんー！」

遙は桐生に飛びついた。

「遙、待たせて悪かったな」

「んーん、きつと来てくれるって判つてたもん」遙は屈託なく答えた。「それに、クラリスも博士も、とつても優しくしてくれたの」

「そうか」

桐生は優しく遙の背中を叩いた。

『あの、ハルカつて娘（コ）、凄いわね』サラとハグをして、ブレナンが笑いながら言った。『言葉も判らないのに、私達にタイミングを合わせてサバイバル出来るなんて、尋常じゃないわ』

『濃密な人生経験の賜物なんですよ』

サラも笑った。

クラリスは、銭形に目で合図をして、すぐにルパンの前にやって来た。

『おじさま、来て下さったのですね』

『そりやあそうさ。約束したじゃねえか。泥棒はウソはつかねえのさ』

クラリスの微笑みに、ルパンも微笑みで返した。

『ありがとう、おじさま』

クラリスはそう言うのと、ルパンの首に腕を回し、唇を重ねた。軽くハグをしようとしていたルパンは、虚を衝かれて硬直してしまふ。

『三十年前の仕返しです』

クラリスははにかんで笑った。

『ガハハハ、今度はルパンが”心”を盗まれたか?』

銭形が目をむいて笑った。

『バカ言うない。この俺様が女に遅れを取るなんて…』

言いかけてルパンは口ごもる。

「ふふ。ルパンさんもまんざらじゃないのね」

遥が薫に向かって、小さく笑った。

『おーい、団体さんの到着だぜ』

次元がのんびりとした調子で言った。桐生達の耳にも、ポリスのサイレンが聞こえて来ていた。既に上空には、LAPDのヘリも接近していた。

ややあって、”オーシャン・アイアール”のペントハウスに、ハラ部長とダニエルが、SWATを率いてやって来た。SWATは状況を確認すると、救護班を呼び出し、実況検分を始めた。

『お前ら、また派手にやってくれたな』

ハラ部長が苦笑しながら言った。

『でもお陰で、デリーカリ一家を一網打尽に出来たわ』

薫が胸を張って言った。

『カオル、ゼニガタ、ここは俺に任せてもらう。だからあんた達には、上層部を納得させられるような』 出来の良い』 報告書を頼むぜ』

ハラ部長は笑いながら、” 出来の良い” で両手の人差指と中指をチョンチョンと曲げた。

そこへ、白人と黒人のバディらしき刑事が二人やつて来た。

『おいおいなんだこりゃ？ランボーでも暴れたのか？』

黒人が大きな声で言った。

『どちらかと言うと、ウルヴァリンにやられた感じだな』

白人がホットドッグを頬張りながら、壁際の瓦礫を眺めた。

二人は桐生に目を付けると、ずかずかと近付いた。

『おい、そのヤクザのお兄さん。これをやったのは、あんたか？』

白人がぶしつけに尋ねて来た。

『ああ、済まない』 黒人がバツジを提示しながら言った。『ロス市警だ。俺はマータフ。

こいつはリッグスだ』

『あんたすげえなあ。日本でもこんなに暴れてんのかい？』

リッグスが挑むような口調で言った。桐生にも、花の同時通訳で意味は判っている。

「これって、挑発されてんのか？」

桐生が呟いた。

そこへ、ハラが割って入った。

『まあ待て、リッグス』

『何だ、どうしたんです警視長こんな所で』

目を丸くするマータフと、桐生を睨んだままのリッグスに、ハラがかいつまんで事情を説明した。ただ、ハラの中ではルパン騒動はニセモノ逮捕で既に終わっていたが。

リッグスはまだ何か言いたそうだったが、クラリス（国家元首）、薫（FBI）、銭形（ICPO）、サラ（財閥）に目をやって、仕方なさそうに肩をすくめた。

『リッグス、相手が悪い。メンド臭そうだ』

『そうだな、マータフ。触らぬ神に祟りなし、だな』

二人は、不承不承ながら尋問を諦めた。特にリッグスは、デリカリと真つ正面からやり合つて潰滅に追いやった日本人に興味津々だったが、ルパンとクラリスが関わっている事で、外務省、ヘタをすればホワイトハウスやCIAも動きかねない状況なので、さすがの二人も手を引くより方法はなかった。

『警視長どの、後で話し、聞かせて下さいよ！』

リッグスには、そう言うのが勢一杯の抵抗だった。

ブツブツ言いながら立ち去る二人を見送って、桐生は遥と共にペントハウスの上に広

がる青い空を見上げた。空は、カリフォルニアらしく青く晴れ渡っていた。海からの風が、疲れた体に心地良い。

「サンタモニカの風、か」

桐生は思わず言葉に出して言ってみた。

と、ルパン、銭形、薫、そして花と次元から同時に突っ込まれた。

「古い！」

つづく

20180630

註 :

『猛虎硬爬山』

結城晶（『バーチャファイター』）の技。←↓P。順足の掌打。神

槍・李書文の得意技。

『ライジング・ニー』『サマーソルト・キック』

サラ（『バーチャファイター』）の技。

↓K →（斜め後ろ）K。

H a s t a l a v i s t a （地獄で会おうぜ）、 b a b y 『ターミ

ネーター2』1991年アメリカ。トライスター・ピクチャーズ配給より。ターミ

ネーターT-800 モデル101型（アーノルドIIシユワルツエネッガー）の名セリ

フ。

両手の人差し指と中指で

ダブルクォーテーションマーク（二重

引用符 〃 ” ”）を表す。air quotes と言うらしい。

ランボー 『ランボー』1982年アメリカ。オライオン・ピクチャーズ配給より。主人公ジョンⅡJⅡランボー（シルベスタスタローン）の事。

ウルヴァリン 『X-MEN』 2000年アメリカ。20世紀フォックス配給より。マーブルヒーローズの一員。

『濃密な人生経験の…』 テレビ朝日『警視庁・捜査一課長』シーズン3 谷中萌奈佳（やなかもなか）の決まり文句。

リーサル・ウエポン ドラマ版 2016 ワーナー

リッグス : クレインⅡクロフォード

マータフ : デイモンⅡウェイアンズ

サンタモニカの風 ナショナルエアコン「楽園」CMソング (19

79) 歌 : 桜田淳子

最終章 夢のカリフォルニア

最終章 夢のカリフォルニア

VACANCES IN LOS ANGELS

最終章 夢のカリフォルニア

ハラ部長の計らいで、ほとんど何の取り調べも受けなかった桐生一行は、取り合えず“エル・トヴアール”のペントハウスに帰ると、皆雑魚寝で夕方近くまで眠った。銭形だけは、

「わしは今から調書だ。LAPDへ行つて来る」

と言ひ残して、出て行つてしまった。

目を覚ますと、隣の“オーシャン・アイアール”は警官や報道陣が群がっていたので、皆でこつそりとビーチへ出て行つた。

桐生、遙、花、薫、サラ、クラリス、ブレナン、そしてルパンは、太平洋に暮れ行く夕陽を見やつた。ビーチは、付近での大騒動のお陰で、人っ子ひとりいない。

「ご免な、遙」薫は頭を下げた。「せっかくの休暇つて事で来てもろたのに、むしろ変な

事件に巻き込んでもおて……」

「んーん、大丈夫よ薫さん。心配しないで」遙はあっけらかんとしている。「だって、色んな所に連れてつてもらったし、サラとか、クラリスとか、博士とか、ルパンさんとか、色んな人に逢えたし。とつても楽しかったよ」

「楽しかったかあ」ルパンが溜め息まじりに言った。「あんた、すげえ娘だなあ。この事件の後で、楽しかったとは中々言えねえぜ」

『でも、私も楽しかったわ』クラリスもそう言つて笑つた。『私のせいで、皆に迷惑を掛けたから、不謹慎だとは思いますが』

『まあ、皆無事だったから、それでいいじゃない』

ブレナンが大きく伸びをしながら言つた。

全員なんとなく納得しかかったが、サラがそれを止めた。

『全員じゃないわ。クドーの様子を見に行かなきゃ』

移動しかけた彼らの背に、立ち止まったままのルパンが声を掛けた。

『じゃあ、俺、そろそろ行くわ』

その声に、クラリスが振り返つた。夕陽を背負つたルパンの表情は、陰に隠れてはつきりとは判らなかつた。

『悪かつたな、おかしな事に巻き込まんじまつて』

『いいえ。それよりも、約束を守って下さった事が、嬉しかったですわ』

『元気でな』

『おじさまも』

クラリスは言いながら、小走りでルパンに駆け寄ると、その体を強く抱き締めた。ルパンも一度だけ、力を込めて抱き締めた。桐生達は、あえて振り向かなかつた。

ややあつて、クラリスが皆の所へ追いついた時には、既にルパンの姿はどこにもなかつた。

ダウンタウンにある病院の集中治療室に、クドーは寝ていた。胸を撃たれて重症ではあつたが、命に別状はないという。

サラは、込み上げる涙を押さえる事が出来なかつた。

『良かった無事で…』

サラは震える声で呟いた。

クドーの命の無事を確認して、彼らはミヤコホテルへ戻つた。ただ、デリ||カリの流した動画が拡散しており、又派出な銃撃戦のお陰でメディアに取り上げられていた。既にホテルのエントランス付近にはパラッチが陣取つていた。

桐生達はケニー||伊藤の手引きで、ロス別院の駐車場に車を入れ、通用口からミヤコホテルに入った。エントランスのパラッチの裏をかいた形になつた。

クラリスのスイートに集まりルームサービスで夕食を摂ると、テレビをつけた。どのチャンネルでも、今朝のサンタモニカのニュースで持ち切りだった。カリオストロの少女、ブライアント家の令嬢、ジェファソニアンの博士、そしてルパン三世。ネタはてんこ盛りである。特にネット動画は何度も流されたので、クラリス公女とブレナン博士、そして謎の日本人少女の事がひっきりなしに組上に載せられる事となった。

「何か、自分がテレビに映ってるって、くすぐったい感じだね」

遥が首をひねりながら、しかし満更でもなさそうな表情で言った。

『もつと楽しい事とか、華やかな事なら良かったのにね』

サラが言った。彼女はようやく笑顔を取り戻して来た。

『いいじゃない、美女三人の緊縛映像。マニアには受けるかもね』

ブレナンはそんな不適切な事を言う。

『アブノーマルなのはあなただけよ』

薫が苦笑しながら言った。

いくら女子トークとはいえ、ドストレート過ぎでしょ。

花はそう思ったが、口には出さなかった。言ってしまったら、遥にも負けそうな気がしたからだ。

一晩寝て、朝起きると、ミヤコホテル前は更に多くのパパラッチやテレビの報道陣が

詰め掛けていた。

「何よこれ。今日はハリウッドで買い物でもしてもらおうと思つてたのに。予定が大無しじゃない」

窓から外の通りを見下ろして、薫が文句を言った。

『ご免なさい、ハルカ、ハナ。せつかくのバカンスだったのに、こんな事になつてしまつて』

クラリスが済まなそうに言う。

「何でクラリスが謝るの？大丈夫。私、ホントに楽しかったんだから。クラリスや、サラや、ブレナン博士に逢えた事、一生の宝物だよ」

『ありがとう』

クラリスは、遥を抱き締めた。ブレナンも、遥とハグをすると、クラリスに目配せをした。

『では、そろそろ用意をしましょう』

クラリスはそう言うのと、クローゼットを開けて、旅行カバンを取り出した。

『私達が出ていけば、マスコミ連中も満足するわきつと』

ブレナンも言いつつ、上着を脱いだ。桐生はそれを見て、無言で部屋を出た。

着替えを終えたクラリスとブレナンは、荷物をまとめてホテルのエントランスまで降

りた。

クラリスは、見送りに降りて来た遙をもう一度ハグした。

『ハルカ、元気でね。カズマと仲良くね』

『うん。クラリスもお仕事頑張ってるね』

ブレナンは、薫と握手をした。

『またクワンティコで逢いましょう』

『ブースによろしく』

薫がそう言うと、ブレナンは手に力を込めた。

ミヤコホテルの支配人のエスコートで二人が外に出ると、マスコミやパラッチが一勢に取り囲んだ。フラッシュが光り、爆発が起こったように光が点滅した。

だが、クラリスとブレナンが適当にあしらって五分程経った所で、カリオストロ公国駐米大使館員、米国務省職員、そしてFBIオフィサーが大挙して現れ、マスコミ共を蹴散らすと、二人をそれぞれ保護して去って行った。パラッチらは呆然としながらも、一定の撮れ高に納得して、全員が散って行った。ホテル前は、ようやく元の静かさを取り戻した。

ブレナン保護のどさくさに紛れ、タホはまたナイト2000に入れ替わっていたので、パイパーと連れ立って、予定通りハリウッドへ買い物に出掛けた。

ハリウッドのロデオ・ドライブは有名人の多い場所なので、逆にマスコミ連中を気にする事なく、遙と花は存分にシヨッピングと観光気分を味わった。

サラはこの界限では結構な顔らしく、行く先々で声を掛けられていたが、とあるブティックで、店内にいた女性客が、突然サラにすがり付いて来た。

『ああ、サラ！良かった無事で！ニユースで見ても、心配してたのよ』

『まあ、ありがとう、ステファン。』ジューダス”聴いたよ。良かったわ』

『ホント？ありがとう、うれしい！』

猫のようにサラになつく女の子を見て、花が硬直する。

『えっ？ちよつとサラ、そのコ…』

『カワイイでしょ？私の妹みたいなものよ』

『レディ！！ガガじゃないの！』

『有名な人？』

その辺の情報には疎い遙は、小さく首をかしげた。

その翌日、レストラン多間で最後の朝食を摂ると、桐生達はミヤコホテルを後にした。LAXへ来ると、また直接滑走路へ乗り込み、ハンガーの前へ乗り付けた。そこには風間譲二が待つており、巨大な飛行機が横たわっていた。

「何これ。」ダイ・ハード2」

花が呟いた。

『ロッキード C-5ギャラクシーだ。USエア・フォースの輸送機だが、快適に日本へ帰れるようにはしておいた』

「風間、日本語で頼むぜ」

桐生に言われて、風間はようやく自分が英語で話している事に気付いたようだ。

「ああ、済まない。ユー達がステーツに来る時に乗って来たエア・フォース・ワンは、現在クラリス公女を乗せている為、こちらになった。ガマンしてくれ」

「私達もここまでやね。一馬、遥、花、みんなお疲れさま。気を付けて帰ってな」
「薰さん、色々ありがとう。とつても楽しかったよ」

「そう言ってもろたら何よりや」

遥と薰は、固く握手を交わした。

花は、サラと何やら言葉を交わし、ハグをしていた。

「サラ、ありがとう。Thank you very much!」

遥はサラにこの上ない笑顔を向けた。

「Your welcome! Take care, Haruka.」

サラも笑顔で握手をした。

「一馬あ、これでお別れやな。また逢うてな」

「ああ」

短く返事をした桐生を引き寄せ、薫は濃厚なくちづけをした。

薫が唇を離れたところへ、サラが近付いて来た。

『ありがとう。ご一緒出来て楽しかったわ』

サラは言うなり、桐生を抱きすくめ、唇を奪った。舌をからめて激しく唇を吸って、ゆつくりと離れた。

『私の事、忘れないでね』

『ちよつとサラ！』

薫は頬を膨らませた。

「これって”修羅場”って言っているのかな？」

花は遙に囁いた。遙は小さく笑っただけだった。

三人を乗せたC-5は、約十一時間のフライトを終え、無事普天間基地に着陸した。風間に見送られて、花は別便で東京へ、桐生と遙はセンチリーでアサガオへ帰って来た。これほどの長期外出は稀なので、子供達は我先に土産話をねだって来た。

名嘉原への土産も渡し、大悟や真島、冴島にも土産品を送り届けると、ようやく元の生活が戻って来た。

遙は自宅静養はまだ続いていたので、朝食が終わり、アサガオの皆を学校へ送り出す

と、桐生と二人で砂浜に出て腰を下ろした。四月終わりの朝の日差しと、風にそよぐ椰子の葉は、遙にカリフォルニアの海岸を思い出させた。

「どうした？」

桐生に問われて、遙は自分が笑顔になっている事に気付いた。

「んーん、何でもない」

そう言う遙の表情は、少し大人びて見えた。

桐生は眩しげに目を細めた。

おわり

20180706

註 :

レディ・ガガ

本名

ステファニー・ジョアン・アンジェリーナ・ジャ

マノツタ

『夢のカリフォルニア』

ママス&パス

1966年

おまけのまとめ

『VACANCES IN LOS ANGELES』色々まとめ

◎引用したドラマ・映画・ゲーム等

?洋ドラ・映画編

『ダイ・ハード』 1988

『ダーティ・ハリー』 1971

『ナイト・ライダー』 1982 (ファーストシーズン)

『白バイ野郎ジョン&パンチ』 1977 (ファーストシーズン)

『特別狙撃隊S.W.A.T.』 1975 (ファーストシーズン)

『刑事コロンボ』 1968

『リーサルウェポン』 1987

『E.T.』 1982

『BONES』 2005 (ファーストシーズン)

『キル・ビル』 2003

『LUCIFER/ルシファー』 2016 (ファーストシーズン)

- 『スタートレック』 1966 (ファーストシーズン)
- 『ビバリーヒルズ・コップ』 1984
- 『PERSON of INTEREST 犯罪予知ユニット』 2011 (ファーストシーズン)
- 『ターミネーター2』 1991
- 『ランボー』 1982
- 『X—MEN』 2000
- 『リーサル・ウェポン ドラマ版』 2016 (ファーストシーズン)
- ？和ドラ・映画・アニメ・ゲーム編
- 『ルパン三世カリオストロの城』 1979
- 『クラリスからの手紙』 1982 『ルパン三世カリオストロの城大事典』 付録
- 『ルパン三世カリオストロの城—再会—』 1997
- 『ルパン・トーク・ルパン』 1992
- 『トリビアの泉』 2002
- 『99・9』 2016 (ファーストシーズン)
- 『ルパン三世 念力珍作戦』 1974
- 『バーチャファイター』 (ゲーム) 1993

『警視庁・捜査一課長』 2012

◎ロス市内観光地等（★印は、個人的に特にオススメ）

LAX（ロサンゼルス空港）

マリナ・デル・レイ

ベニスビーチ（オーシャン・フロント・ウオーク）★

サンタモニカビーチ

ダウンタウン★

シビック・センター

シティ・ホール（ロスの市庁舎）

リトル・トーキョー★

ミヤコホテル

パーカーセンター（LAPD）ロス市警察署★

オルベラ街★

『La Golondrina』

「王者（Ohjah）」

「レストラン多聞」

『遼東（フアーイースト）』（夜だけやってるバー）

ナッツベリーファーム★

『PINK'S』★

デイズニールランド・リゾート★

グリフィス天文台★

高野山真言宗米国別院★

ユニバーサル・スタジオ・ハリウッド★

ロサンゼルス・ガン・クラブ★

UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）ロイス・ホール★

ハリウッド署

クリステイン・エマーソン・リードパーク

ハリウッド ロデオ・ドライブ

◎おまけ : 実在の人物（※印は筆者と面識のある人）

※ヴァレット（駐車係）のホセ（本名不明）

※ビショップ宮田

※ケニー＝伊藤

テリー||ハラ

レディ・ガガ（ステファニー・ジョアン・アンジェリーナ・ジャーマノッタ）